

日田市埋蔵文化財調査報告書第20集

山口遺跡

2000年

日田市教育委員会



調査地点周辺の航空写真

序 文

ここ数年来、一年間に日田市内で行われる発掘調査の数も、年々増加の一途をたどってきています。

今回報告します山口遺跡は、市内東有田地区の県営ほ場整備事業に先立ち調査を行った遺跡で、その成果をまとめたものです。

調査では、古墳時代の住居跡や江戸時代の建物跡などが発見され、東有田地区の祖先の生活の痕跡を知ることができました。

本書が今後の地域の歴史資料として、また文化財愛護の普及・啓発にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご指導、ご協力を賜りました関係者の皆様方に、心よりお礼を申し上げます。

平成12年2月29日

日田市教育委員会教育長 加藤 正俊

例 言

1. 本書は、日田市教育委員会が大分県耕地課からの委託を受け、平成9・10年度に発掘調査を実施した山口遺跡の埋蔵文化財調査報告書である。
2. 発掘現場での遺構実測は調査員のほかに別府大学生である松竹智之・野内太一郎両氏の協力を得た。また、遺構写真は吉田・山路が行った。
3. 本書に使用した遺物の実測および遺構・遺物の製図は吉田・山路が行ったほか、財津香奈子氏の協力を得た。
4. 遺物写真については文化財写真家長谷川正美氏に撮影いただいた。
5. また、本書に使用した空中写真は、九州航空株式会社に委託し撮影したのを使用した。
6. なお、出土遺物や図面類については、日田市埋蔵文化財センターに保管している。
7. 調査から本書作成にあたっては次の方々のご指導、ご協力をいただいた。
後藤宗俊（別府大学教授）、坂本嘉弘・吉田寛（以上、大分県教育委員会）
日高正幸（小石原村教育委員会）
8. 本書の執筆分担は、第1・2章を土居、第3章1を吉田、第3章2・3と第4章を山路が行った。
9. 本書の編集は土居・山路が協議し、山路が行った。
10. 題字は、原田良伸（日田市立博物館長）氏の揮毫による。

本文目次

第1章 調査の経過	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の経緯	1
3. 調査組織	2
第2章 遺跡の立地と環境	3
第3章 調査の内容	7
1. I区の遺構と遺物	7
2. II区の遺構と遺物	11
(1) 調査の概要	11
(2) 遺構と遺物	11
3. III区の遺構と遺物	41
(1) 調査の概要	41
(2) 遺構と遺物	41
第4章 まとめ	44

挿 図 目 次

第1図	山口遺跡周辺の遺跡分布図（1/25,000）	4
第2図	山口遺跡発掘調査区位置図（1/800）	5～6
第3図	I区遺構配置図（1/400）	7
第4図	I区出土遺物実測図（1/3）	8
第5図	II区遺構配置図（1/300）	9～10
第6図	II区1号竪穴住居跡実測図（1/60）	12
第7図	II区1号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/2・1/3）	12
第8図	II区1号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）	13
第9図	II区1号竪穴住居跡カマド出土遺物実測図（1/3）	13
第10図	II区2号竪穴住居跡実測図（1/60）	14
第11図	II区2号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）	14
第12図	II区2号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/2・1/3）	14
第13図	II区2号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）	16
第14図	II区2号竪穴住居跡カマド出土遺物実測図（1/3）	16
第15図	II区3号竪穴住居跡実測図（1/60）	17
第16図	II区3号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）	18
第17図	II区3号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）	18
第18図	II区4号竪穴住居跡実測図（1/60）	18
第19図	II区1号掘立柱建物跡実測図（1/100）	19
第20図	II区2～6号掘立柱建物跡実測図（1/100）及び出土遺物実測図（1/3）	20
第21図	II区7～9号掘立柱建物跡実測図（1/100）及び出土遺物実測図（1/3）	21
第22図	II区10～12号掘立柱建物跡実測図（1/100）	22
第23図	II区13～15号掘立柱建物跡実測図（1/100）	23
第24図	II区16～21号掘立柱建物跡実測図（1/100）	24
第25図	II区1～5号土坑実測図（1/30）	25
第26図	II区6～13号土坑実測図（1/30・1/20）	27
第27図	II区14～16号土坑実測図（1/30）及び出土遺物実測図（1/3）	28
第28図	II区17～20号土坑実測図（1/30・1/40）	29
第29図	II区21・24～27号土坑実測図（1/30）	30
第30図	II区28～32号土坑実測図（1/30）	31
第31図	II区33～36号土坑実測図（1/30・1/40）	32
第32図	II区37～44号土坑実測図（1/30・1/40）及び出土遺物実測図（1/3）	34
第33図	II区48号土坑実測図（1/40）及び出土遺物実測図（1/3）、柱穴出土 遺物実測図（1/3）	35

第34図	Ⅱ区45・46号土坑及び1～3号井戸実測図(1/30・1/40) ……………	36
第35図	Ⅱ区47号土坑・1号近世墓実測図(1/30)及び出土遺物実測図(1/2・1/3) …	37
第36図	Ⅱ区2号近世墓実測図(1/30)及び出土遺物実測図(1/2) ……………	37
第37図	Ⅱ区1・2・4号溝状遺構及び石列状遺構実測図(1/40) ……………	39
第38図	Ⅱ区1～3号区使途不明遺構(1/30)及び出土遺物実測図(1/3) ………	40
第39図	Ⅲ区遺構配置図(1/300) ……………	42
第40図	Ⅲ区1・2号掘立柱建物跡実測図(1/100) ……………	43

図 版 目 次

巻頭図版	調査地点周辺の航空写真
図版1	Ⅰ区全景
図版2	Ⅰ区出土遺物
図版3	Ⅱ区全景
図版4	Ⅱ区1号竪穴住居跡
図版5	Ⅱ区2号竪穴住居跡
図版6	Ⅱ区3号竪穴住居跡
図版7	Ⅱ区1号近世墓
図版8	Ⅱ区2号近世墓
図版9	Ⅱ区1・2号井戸 Ⅱ区1号石列状遺構
図版10	Ⅱ区4号溝状遺構 Ⅱ1・2号区使途不明遺構
図版11	Ⅱ区1・2号竪穴住居出土遺物
図版12	Ⅱ区2・3号竪穴住居出土遺物
図版13	Ⅱ区2・6～9号掘立柱建物出土遺物 Ⅱ区3・15・25・41号土坑出土遺物
図版14	Ⅱ区48号土坑出土遺物 Ⅱ区272・277号柱穴出土遺物 Ⅱ区1・2号近世墓出土遺物 Ⅱ区2・3号使途不明遺構出土遺物
図版15	Ⅲ区全景

第1章 調査の経過

1. 調査に至る経過

今回発掘調査を行った山口遺跡は、大分県振興局が日田市街地東部を流れる有田川中流域沿いで平成9年度より実施計画した県営ほ場整備事業東有田地区に先立つものである。

この事業実施にあたっては前年度に大分県教育委員会が行った詳細分布調査の結果、試掘調査が必要とされる場所に該当したことから、市教委では平成9年11月6・7日に当該予定地の試掘調査を行い遺跡の存在の有無を確認した。調査では当該工事予定地区内において遺跡の存在があきらかとなり、その取り扱いについて県振興局と協議を重ねた。

その結果、事業予定地のうち現状保存が不可能な切土部分については本格的な発掘調査を行うことでまとめ、平成9・10年度の2カ年にわたって調査を実施することとなった。

その後、双方で発掘調査の期間や経費などについて打ち合わせ、市教委が県振興局の委託事業として発掘調査を受託することでまとめ、契約書を交わし、3月3日より初年度（I区）の本格的な現場作業を開始した。

なお、発掘調査事業の内容は事業予定地区である東有田地区山口工区造成予定面積37,300㎡のうち、平成9年度に1,175㎡の発掘調査、平成10年度に4,850㎡の発掘調査および整理作業とし、最終年度の平成11年度に発掘調査報告書の発行を行った。

2. 調査の経緯

2ケ年にわたる発掘調査の概要について、以下簡略をまとめる。

平成10年3月3日／機械を入れてI区の発掘調査を開始する。

3月4日／作業員を入れ、調査区の遺構検出作業を開始する。

3月9日／遺構の掘り下げを始める。

3月18日／遺構の実測を行う。

3月20日／器材を撤収し、I区の発掘調査を完了する。

4月9日／機械を入れてII・III区の発掘調査を開始する。

4月10日／本日より作業員を入れるが、調査区に水が溜まり水抜き作業を行う。

4月27日／遺構検出も進み、柱穴を掘り始める。

4月29日／II区の遺構配置図を作成する。

4月30日／別府大学後藤宗俊先生の現地指導を受ける。

5月15日／遺構の掘り下げも進み、個別実測を開始する。

5月18日／大分県文化課坂本嘉弘氏の現地指導を受ける。

5月20日／竪穴住居跡の掘り下げを始める。

5月25日／空撮のための清掃準備に入る。

5月27日／空撮を行う。

6月6日／実測図の補正を行う。

6月7日／器材の撤収を行い、II・III区の発掘調査を完了する。

3. 調査組織

調査関係者は下記のとおりである。なお、職名は当時のままとしている。

調査主体 日田市教育委員会

調査責任者 加藤 正俊（日田市教育長）

調査事務 原田 俊隆（文化課課長）

長尾 幸夫（文化課課長補佐兼文化財係長）～平成11年3月31日

石井 英信（文化課課長補佐兼文化財係長）平成11年4月1日～

森山 一宏（文化課主任）～平成10年3月31日

佐々木豊文（文化課主任）平成10年4月1日～

美野寿美香（文化課臨時職員）平成11年5月25日～

調査員 土居 和幸（文化課主任）

行時 志郎（文化課主任）

吉田 博嗣（文化課主任）

若杉 竜太（文化課主事）

山路 康弘（文化課嘱託）平成10年4月1日～平成10年7月31日 現、大分県教育委員会嘱託

調査作業員 秋月 真澄・秋月ミサオ・穂本 文雄・石井 貞美・諫山三代子・井下 君子

井下 京子・井下 竹子・伊藤 巧・江藤キミ子・荏隈 典子・岡部 直人

小野マサ子・梶原 利徳・木下富三郎・熊谷百合子・小下 一・五反田静子

財津 利枝・財津 由太・財津サワ子・財津 浪吉・庄内 武子・其畑登美代

高倉登美子・高倉 美利・津江 久徳・中原 琴枝・長尾キクエ・長尾 伸也

長尾 俊男・永田 信子・松岡 初次・松竹 智之・吉長ハルエ・吉弘 昇

整理作業員 穴井トヨ子・今井由美子・梶原ひとえ・小埜 和美・桑野 菊美・黒木千鶴子

田中 静香・聖川 暢子



調査風景



第2章 遺跡の立地と環境

山口遺跡は、日田市大字東有田字山口に存在する遺跡である。

この遺跡の位置する場所は、日田盆地の東部を東西方向に流れる花月川支流の一つである、有田川中流域の標高約122mの河岸段丘上に位置する。標高678mの月出山を源とする有田川はその上流域は谷状をなすが、ちょうど遺跡付近から西側はそれまでの谷状地形が開析し、発達した河岸段丘が広がる景観へと変わる。日田盆地と呼ばれる境にあたる場所でもある。また、遺跡のすぐ北側背後には日田八原の一つに数えられる「須ノ原」と呼称される標高約150mの台地が広がる。

この山口遺跡を含む有田川流域沿い一帯は、古代日田にあっては在田郷と呼ばれていた地域に相当する。とくに遺跡西側の有田川流域には「口ノ坪」や「町ノ坪」などの条里関連地名が残っており、条里地割の想定がなされている。また一方この河川流域沿いは、太宰府から日田を抜け豊後府内へと通ずる古代官道筋にあたるとも考えられている。

中世末期には大友義鑑の指名による郡老8人中の石松氏が、有田川下流右岸の石松をその拠点としていた記録が残る。近世にはいり日田が幕府直轄地（天領）となると、有田川流域沿い一帯は森藩久留島領地となり、その代官所が山口遺跡から西へ約1kmに置かれた。残る絵図から中世期には周辺を支配していた師富氏が拠点としていた場所とも言われ、日田永山布政所と森藩を結ぶ近世路が山口遺跡に近接して通っていたことが推定される。

山口遺跡を中心にみた有田川下流域沿には多くの遺跡がみられ、特に有田川左岸域は河川と並行して走る大分自動車道建設や流域沿いの基盤整備事業に伴う調査が行われるなど発掘例も多い。主な遺跡としては山口遺跡の西側、須ノ原台地の南側に位置する全長31mの城山古墳がある。本格的な調査は行われていないが、主体部が石棺もしくは堅穴式石室と推定される5世紀代の日田地域では古式の前方後円墳である。

また、有田川とその支流求来里川が合流する左岸一帯には弥生時代末の環濠集落が発見された平島遺跡、弥生時代中期から後期の集落が調査された祇園原遺跡、86基の横穴墓が調査された平島横穴墓群などのほかに、石ヶ迫遺跡・クビリ遺跡・有田塚ヶ原遺跡などが存在する。さらに求来里川流域には箱式石棺を主体部とする尾漕2号墳、古墳時代後期の大規模集落が調査された長迫遺跡や尾漕遺跡など数多くの遺跡が散見できる。このほか、有田川右岸には5世紀代の円墳である有田古墳や縫ヶ迫古墳群、有田川と花月川の合流点南側には夕田古墳や夕田横穴墓群などが点在している。

註1) 長 順一郎 「一豊後国日田郡一中世村落と武士団」『日田文化35号』 日田市教育委員会 1992年

註2) 大分県前方後円墳研究会 「大分県の前方後円墳集成(1)」 『おおいた考古』おおいた考古第1集 1998年

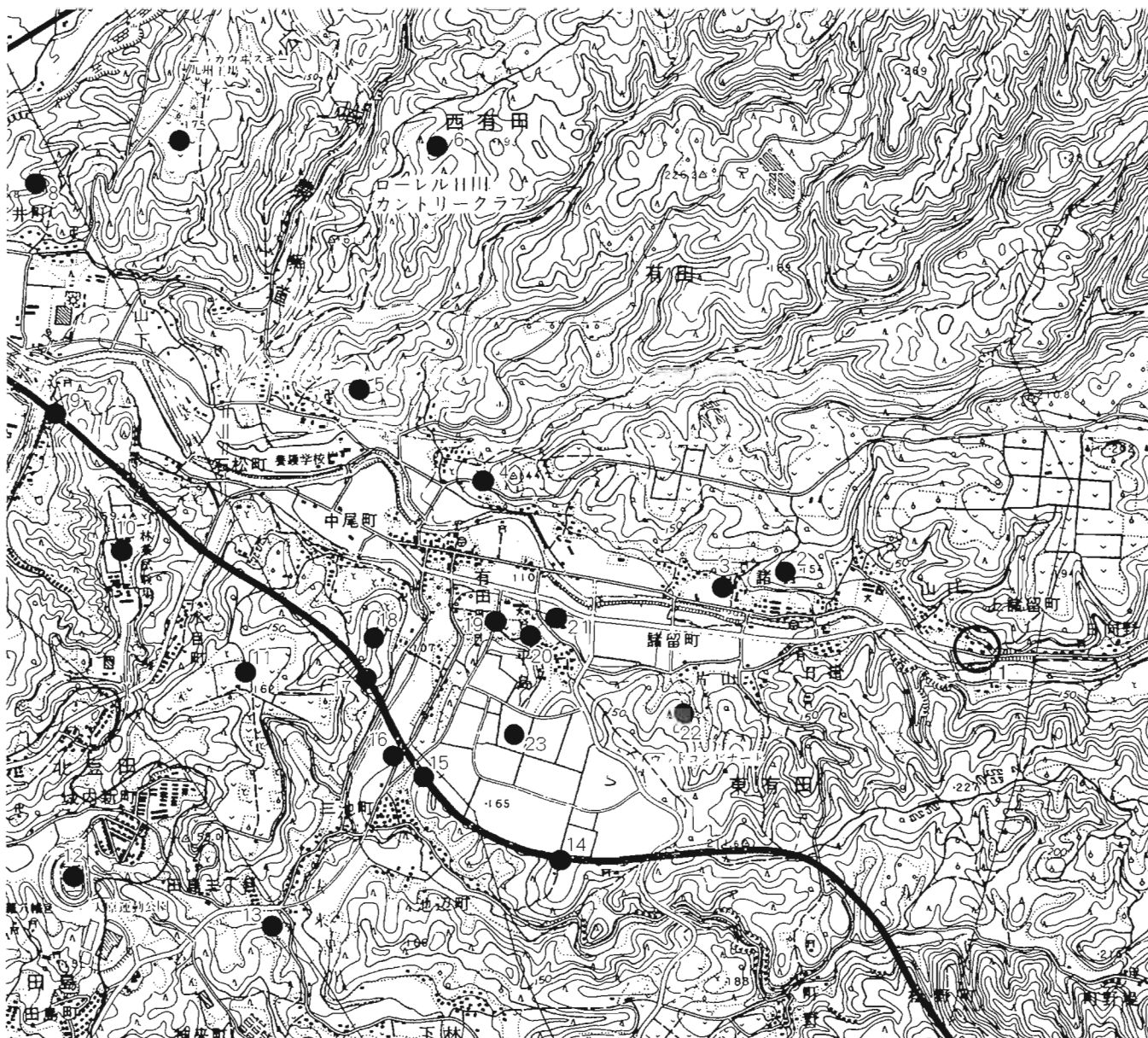
註3～註8) 行時志郎編 「有田塚ヶ原遺跡群」 日田市教育委員会 1999年

註9) 友岡信彦編 「夕田遺跡群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(14)』 大分県教育委員会 1999年

(参考文献)

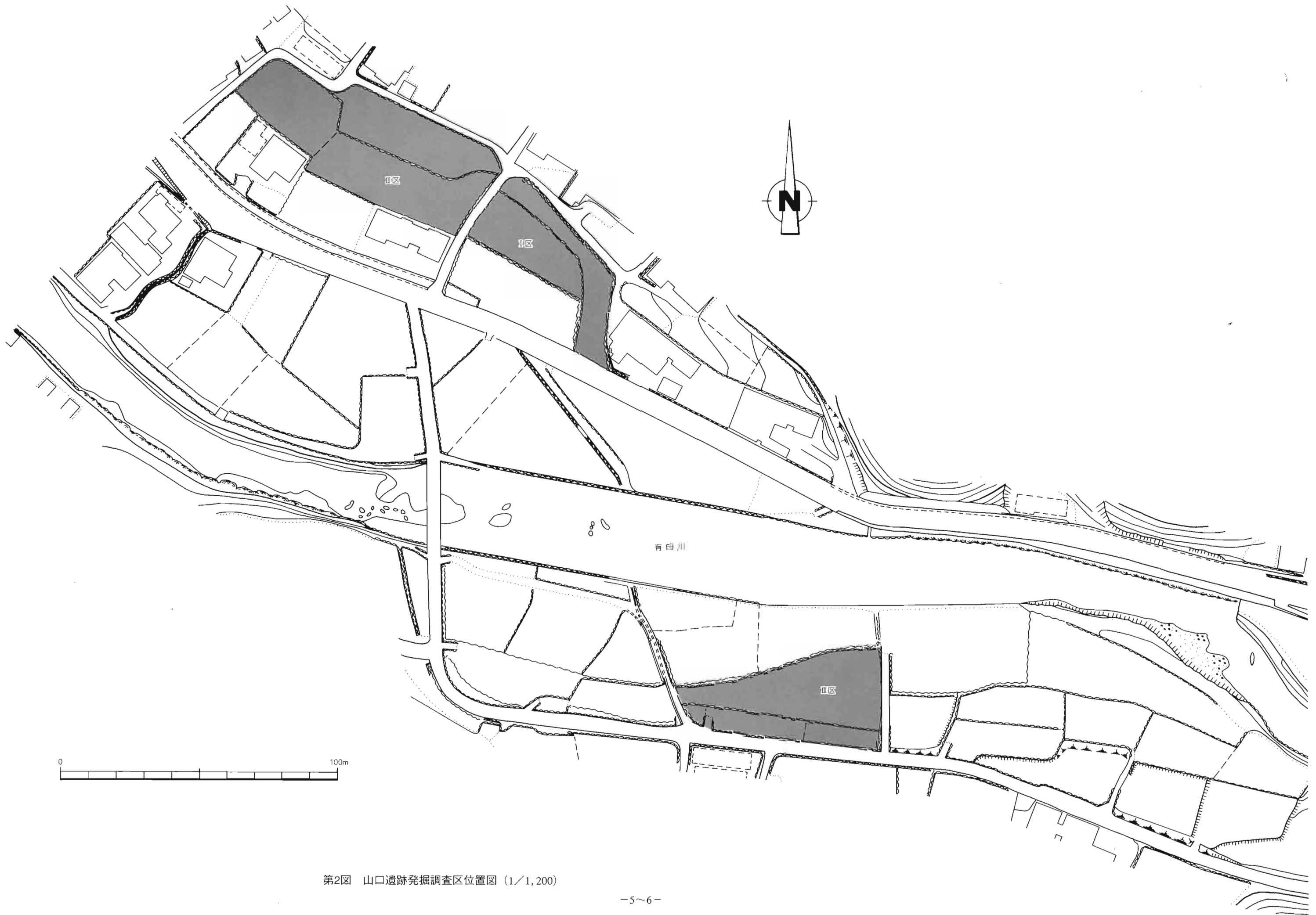
『角川日本地名大辞典44大分県』 角川書店 1980年

『日田市史』 日田市 1990年



第1図 山口遺跡周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | |
|-------------|--------------|-----------|--------------|
| 1. 山口遺跡 | 8. 縫ヶ迫古墳群 | 15. 尾漕1号墳 | 22. クエト古墳群 |
| 2. 城山古墳 | 9. 夕田古墳群 | 16. 尾漕遺跡 | 23. 有田塚ヶ原遺跡群 |
| 3. 世尊寺跡 | 10. 佐寺原遺跡 | 17. 大迫遺跡 | 平島横穴墓群 |
| 4. 小寒水遺跡 | 11. 中尾原遺跡 | 18. 中尾古墳群 | 石ヶ迫遺跡 |
| 5. 有田古墳 | 12. 赤迫遺跡 | 19. 塔ノ本古墳 | 有田塚ヶ原遺跡 |
| 6. 西有田赤ハゲ遺跡 | 13. 馬形遺跡 | 20. 平島古墳 | クビリ遺跡 |
| 7. 葛原遺跡 | 14. 有田塚ヶ原古墳群 | 21. 平島遺跡 | 祇園塚遺跡 |
| | | | 尾漕2号墳 |
| | | | 長迫遺跡 |



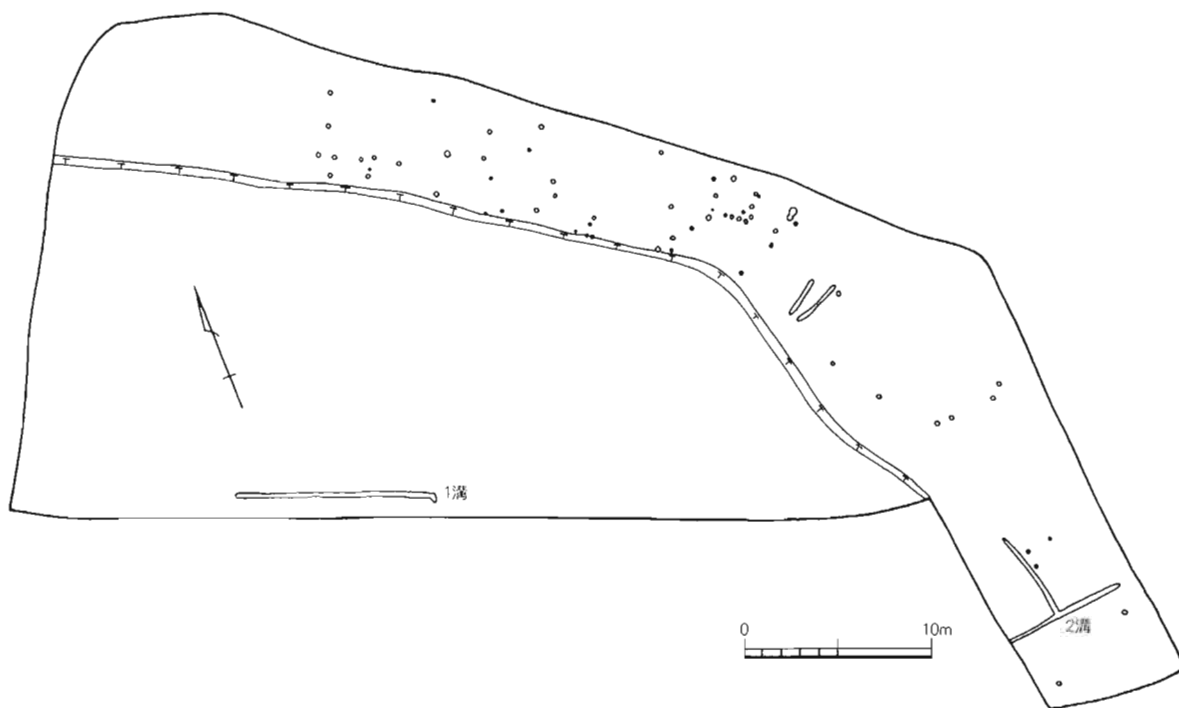
第2図 山口遺跡発掘調査区位置図 (1/1,200)

第3章 調査の内容

1. I区の遺構と遺物

I区（第3図）では、ピット68基・溝状遺構2条が検出された。柱穴の埋土は暗褐色砂質土と灰褐色砂質土に分けられ、平面径は約15～30cm、深さは約5～35cm程度である。各々の柱穴から遺物の出土はなく時期は確かではないが、規模や埋土及び一括資料の遺物などから中世以降のものと思われる。1号溝状遺構は南側で略東西方向に伸びているのが確認された。検出されたのは、長さ10.5m、幅20cm、深さ10cmと小規模で東方向にやや浅くなり南側に伸びる様相を見せている。埋土は暗褐色砂質土である。また、2号溝状遺構は、東西方向に10mほど確認されその垂直方向に8mが検出された。西側にわずかながら傾斜しており、調査区の外へ伸びそうである。幅は平均で20cm、深さは5cm程度である。埋土は灰褐色砂質土である。1・2号ともに遺物の出土はなく時期は不明である。

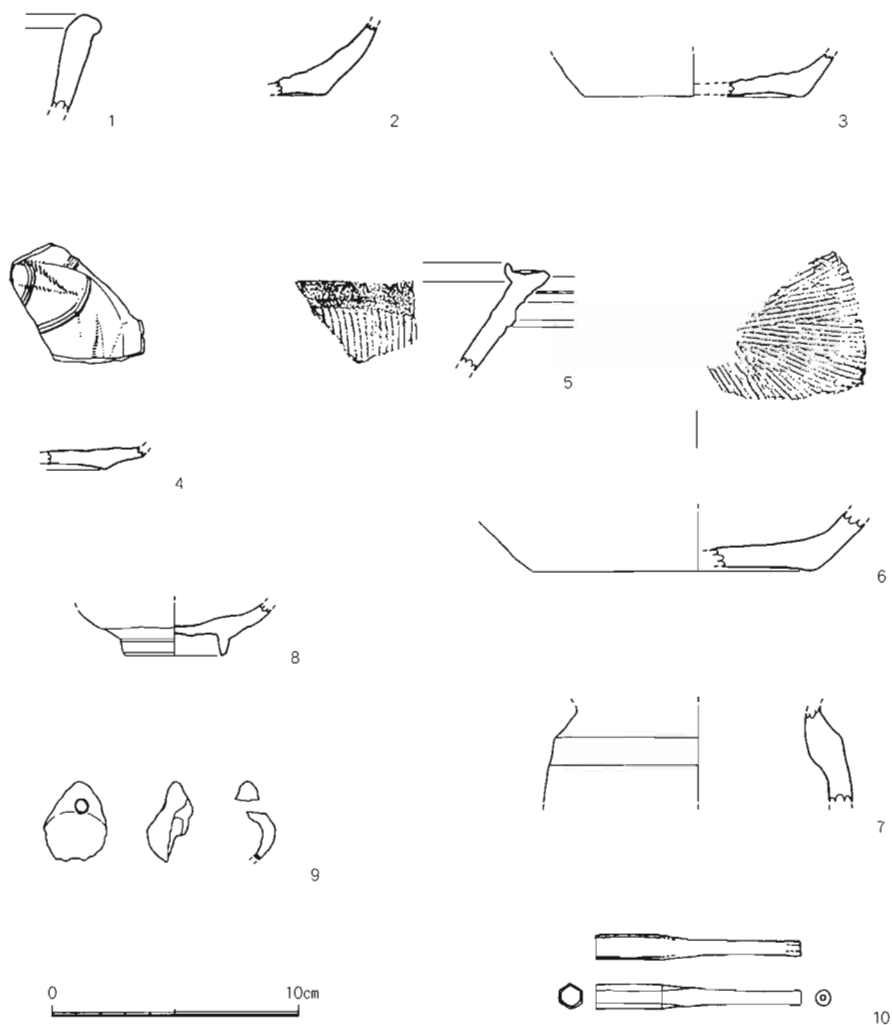
出土遺物は、遺構検出中に一括採集されたものでここでは図化可能なものの一部を紹介する（第4図）。1は瓦質土器で鉢の口縁部である。時期は15～16世紀の所産である。2は土師質土器で坏の底部である。内面は渦状ナデが施され、外面底部は糸切りである。色調は橙褐色を呈し、底径は復元で8.8cmを測る。3は土師質土器で坏の底部である。内面は渦状ナデが施され、外面底部は糸切りで一部板状圧痕が残る。径は外底部が不整なため正確ではないが2の土師質土器とほぼ同径ではないかと思われる。色調は橙褐色を呈する。4は同安窯系青磁皿の底部である。時期は12世紀代と思われる。底径は復元で4.8cmを測る。5は陶器の摺鉢である。製作は小石原のもので、時期は



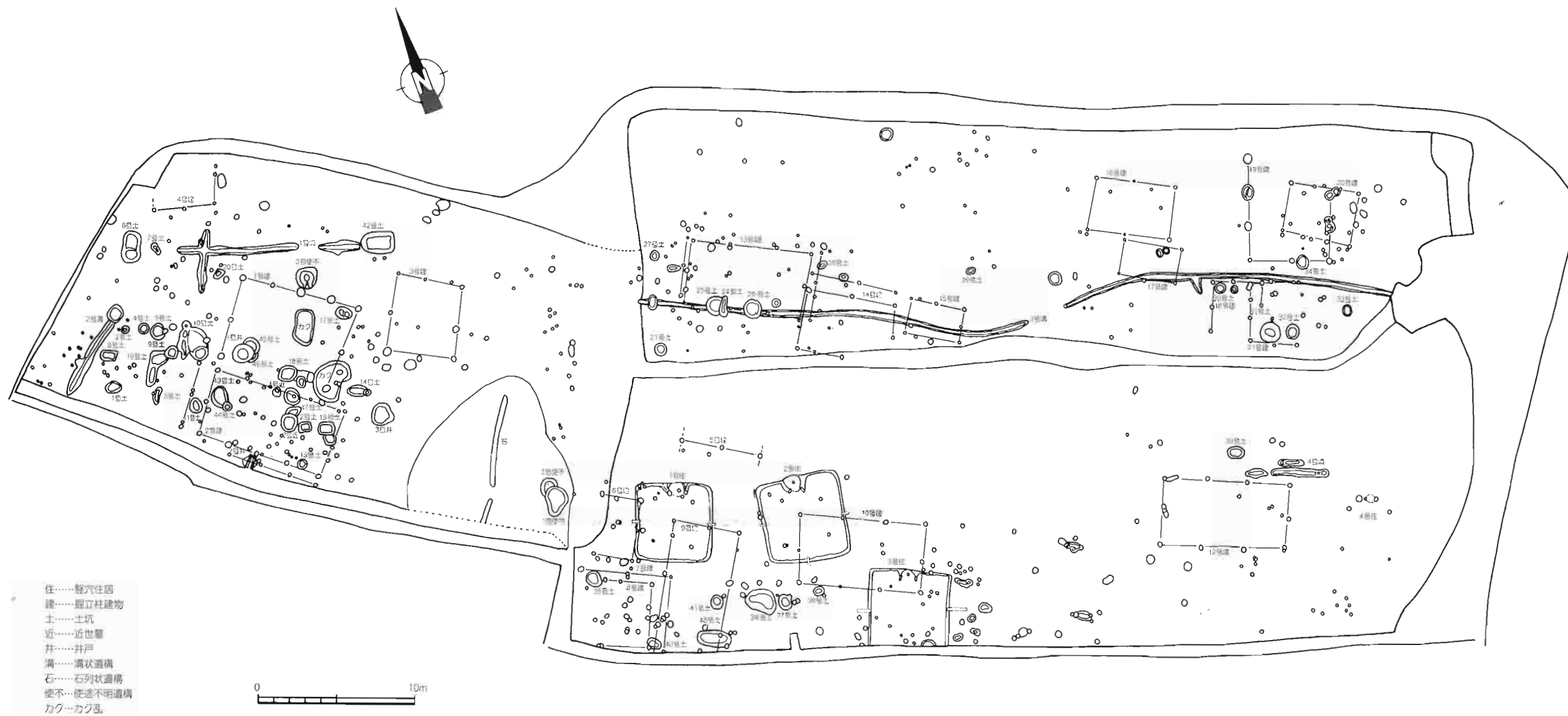
第3図 I区遺構配置図 (1/400)

17世紀後半～18世紀中頃の所産である。色調は赤茶褐色を呈する。6は陶器の摺鉢底部である。楕目は9本単位で構成される。底径は復元で11.4cmを測る。製作は小石原のもので、時期は18～19世紀頃の所産である。色調は赤褐色を呈する。7は陶器で瓶の頸～胴部である。内外面にはヨコナデが施されている。産地不明である。8は天目碗で17世紀頃の所産である。9は土鈴で半分を欠損している。高さ3.2cm、幅1.6cmを測る。10は青銅製の吸口である。長さ8.3cm、厚さは接続部（断面六角形）で1cm、吸口部（断面円形）で0.6cmを測る。

このほか、図化していない遺物には近世に属するものが多く17世紀前半の砂目積段階の肥前白磁皿や古伊万里の碁笥底碗、同時期では鉄釉陶器の袋物などが出土している。18世紀代では肥前系磁器や高取系の陶器が主をなしている。



第4図 I区出土遺物実測図 (1/3)



第5図 II区遺構配置図 (1/300)

2. II区の遺構と遺物

(1) 調査の概要

今回発掘調査の対象となった地点は、前年度1次調査を行った地点（I区）の西側にあたる場所と、市道を挟み約450m程離れた場所の2ヶ所である。

調査では市道を挟んで調査区が分かれることから、第2図のように北側をII区とし、南側をIII区とした。調査区中心での標高は123.730mを測り、II区からIII区にかけては緩やかに傾斜し、川を挟んで緩やかに上昇する。調査において検出した遺構は、II区では竪穴住居跡4基・掘立柱建物21棟・土坑47基・井戸3基・近世墓2基・溝状遺構4条・石列状遺構1条・使途不明遺構3基・柱穴420（小ピットを含む）である。柱穴の中には、建物の存在が想定できるものとできないものがあるが、ここでは全てを柱穴と総称している。遺物は、石器・須恵器・土師皿・輸入陶磁器・陶磁器・簪・煙管の雁首・銭貨などが出土している。これらの情報から、この遺跡は古墳時代から近世・幕末までバラエティーに富んでいることがわかった。

また、調査区II区・III区とも地山は暗褐色土層である。遺構内の埋土には、明褐色土層・暗褐色土層・茶褐色土層・明茶褐色土層・暗茶褐色土層・黒褐色土層・暗黒褐色土層・暗灰褐色土層（粘り有）・青灰褐色砂質層が見られる。遺跡の上が水田として利用されていたため、マンガンなどの鉄分状のものが滲みだし、埋土に混入していた。

(2) 遺構と遺物（第5図）

1号竪穴住居跡（第6図）

遺構は調査区のやや中央部南側に位置し、北壁のほぼ中央にはカマドを付設している。遺物はカマド周辺に多く分布し、中央より南側からはほとんど出土していない。住居平面プランは方形をなしており、規模は約4.77m×4.92mを測る。また床面の深さは10～16cmを測る。この遺構の支柱穴は4本であり、ほかに遺構内から柱穴17基を確認した。しかし遺構に伴わない柱穴も含まれる。床面から1番深い支柱穴の深さは33cmである。

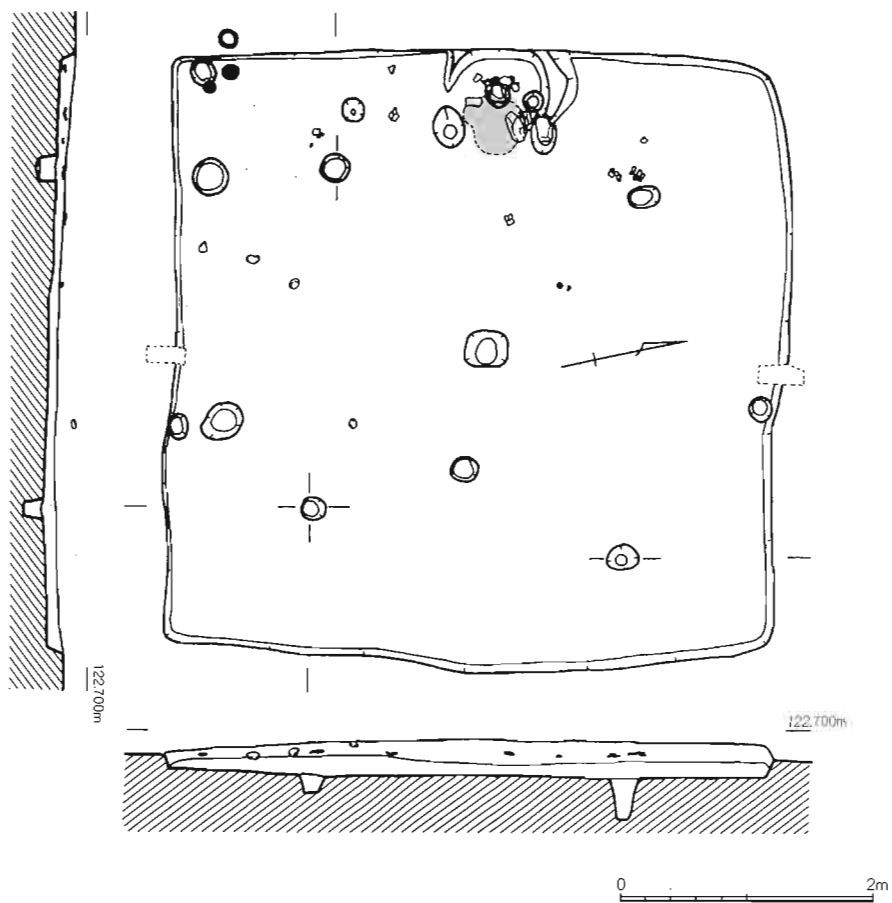
1号竪穴住居跡出土遺物（第7図1～4）

遺物1は使用痕剥片である。石材は姫島産黒曜石を使用し、縦長剥片を素材としている。最大長3.4cm、最大幅1.8cm、最大厚0.6cm。

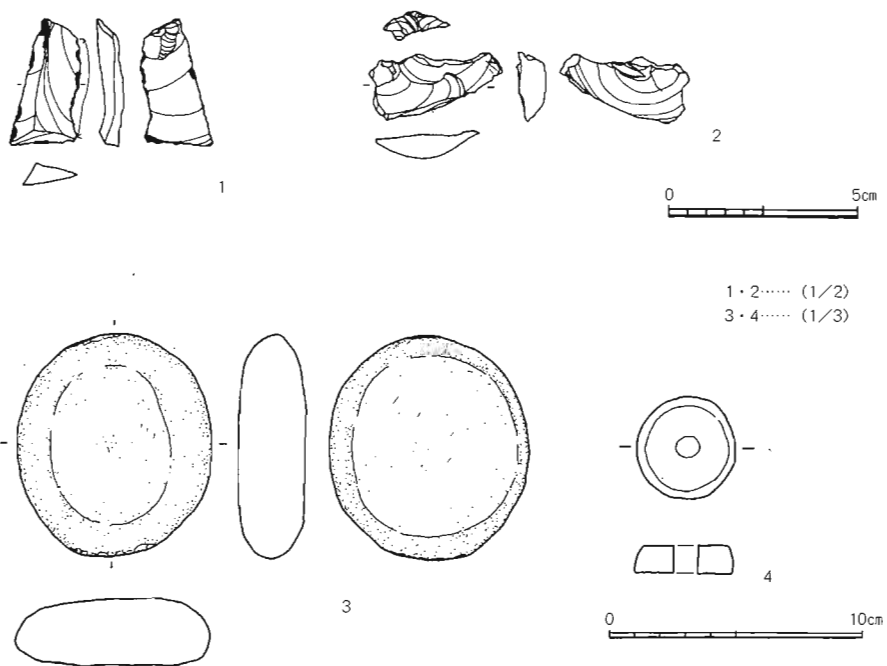
遺物2は剥片である。石材は黒曜石を使用している。ポジ面左端部に加工次に剥離された痕跡がある。最大長3.5cm、最大幅1.7cm、最大厚0.7cm。

遺物3は敲石である。石材は不明だが、河原石を利用したものと考えられる。上下端部を使用している。最大長8.9cm、最大幅7.8cm、最大厚2.7cm。

遺物4は紡錘車である。石材は滑石ではなく、在地の石を用いている可能性が高い。最大径3.9cm（3.4cm）、最大厚1.1cm。



第6图 II区1号竖穴住居跡実測図 (1/60)

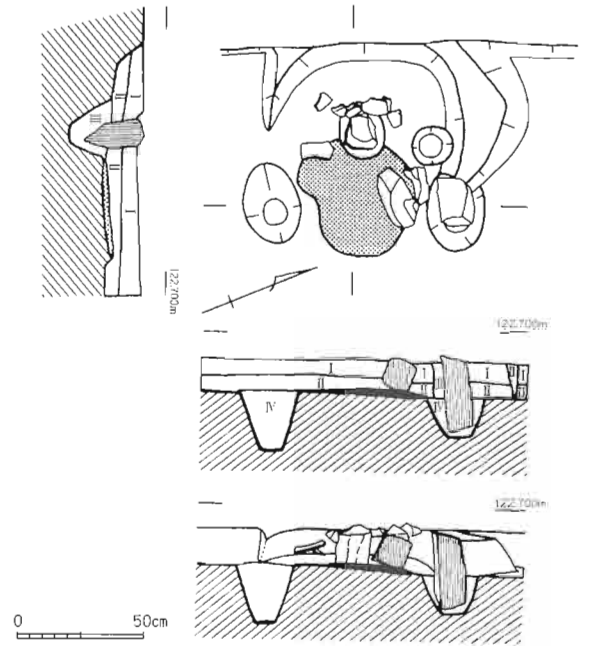


第7图 II区1号竖穴住居跡出土遺物実測図 (1/2 · 1/3)

1号竪穴住居跡カマド（第8図）

このカマドは、住居北壁に付設されたものである。東側焚口袖石と支脚が残存する（西側焚口袖石は既に抜かれている）。また東側焚口袖石は折れてカマド内に入り込んでいる。この袖石の掘り方はカマド袖に2ヶ所確認している。最大深は東側が15cm、西側が23cmを測る。規模は焚口部南部から北壁までの奥行き77cm、東西袖幅94cmを測る。カマド基盤床の平面プランはほぼ円形で長軸48cm、短軸47cm、最大深5cmを測る。基盤床は熱変赤色硬化した焚燃部直下のみ掘削されていた。また支脚を中心に遺物が多数出土していた。このことから住居廃絶後に伴うカマド等の破壊行為において、カマドとともに壊され一括して廃棄されたものと考えられる。

カマド内の埋土は、Ⅰ層：明茶褐色土層（炭化物を含む）、Ⅱ層：暗茶褐色土層（粘りが有・焼土及び炭化物を含む）、Ⅲ層：黒褐色土層（抜取痕としては小さいため、袖石の基礎として用いられたと考えられる）、Ⅳ層：茶褐色土層となっている。またⅡ層中からは、多量の焼土及び炭化物が混入している部分があり、それらはカマドの内側の焼成を受けた部分が崩れたものと考えられる。

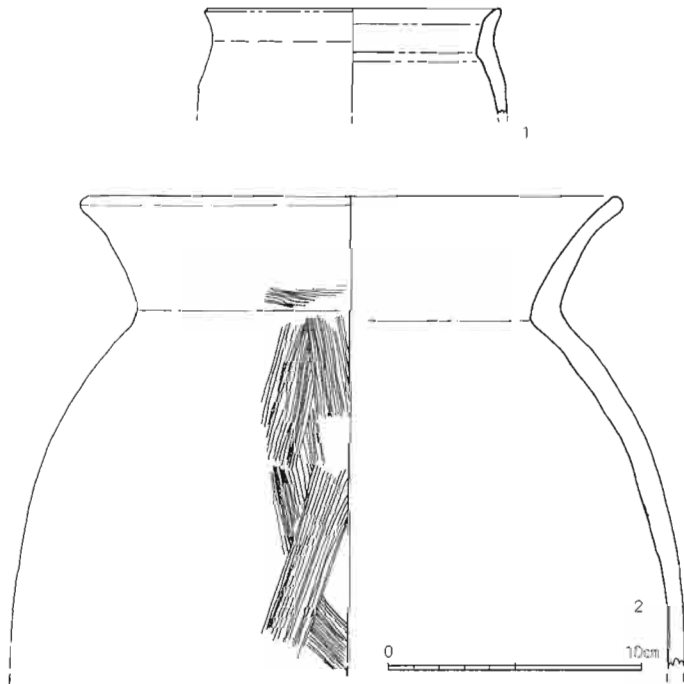


第8図 Ⅱ区1号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

1号竪穴住居跡カマド出土遺物（第9図1・2）

遺物1は壺である。胎土には角閃石・長石・石英・雲母が多く含まれているため、質的には悪い。

焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面がにぶい褐色である。遺物は二次焼成を受けており、内側には煤が付着している。外面の調整は口縁部から頸部にかけて横ナデとなっている。復元口径は約11.4cmである。

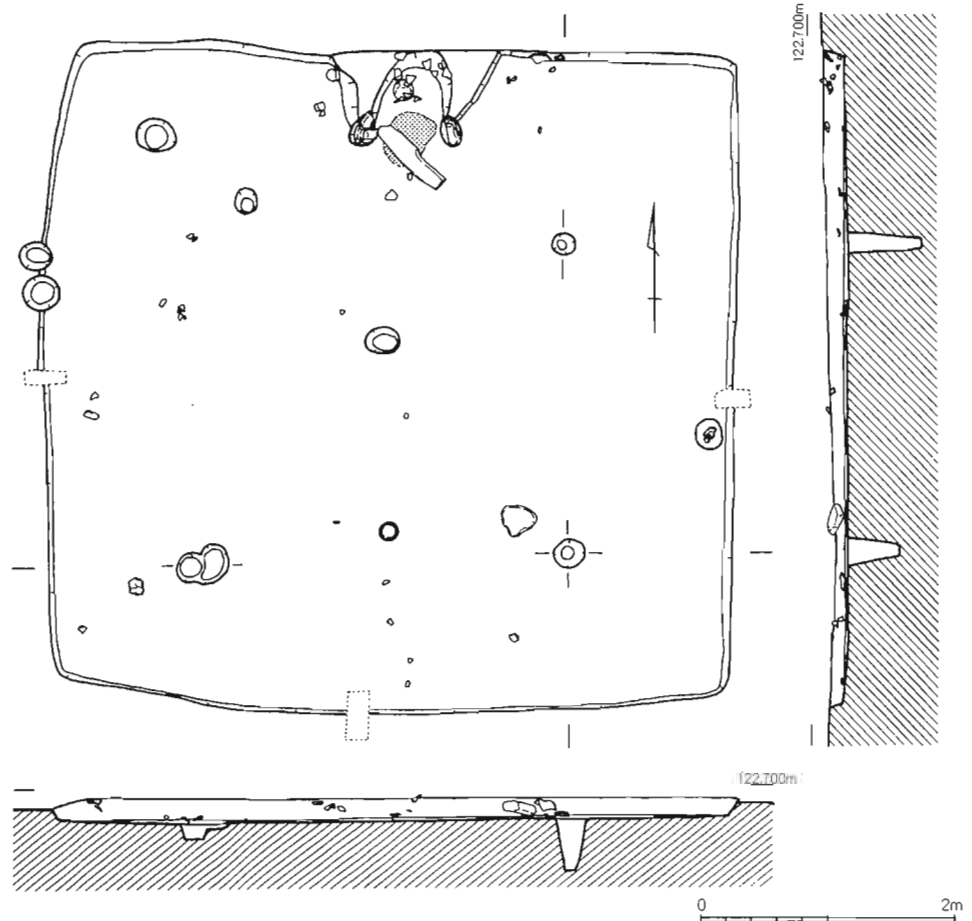


遺物2は甕である。胎土には角閃石・石英・雲母が含まれている。一部に0.5cm程の小石が混入している。焼成は良好で、色調は内外面とも淡い茶褐色である。遺物は二次焼成を受けている。外面の調整は口縁部から頸部にかけて横ナデ及び不定方向ナデ、胴部はハケ後縦ナデ及び不定方向ナデである。内面の調整は口縁部から頸部にかけて横ナデ、胴部は不定方向ナデである。復元口径は約21cm、復元胴部最大径は約26.8cmである。

第9図 Ⅱ区1号竪穴住居跡カマド出土遺物実測図（1/3）

2号竪穴住居跡（第10図）

遺構は調査区のほぼ中央南部に位置し、1号竪穴住居跡の東側約3.3mのところにある。軸はちょうど南北をさしている。北壁のほぼ中央にはカマドを付設している。遺物はカマド内を中心に多数出土しており、ほか中央より西側にかけて散在している。この遺構の住居平面プランは方形をなしており、規模は約5.26m×5.44mを測る。また床面の深さは10～21cmである。この遺構の支柱穴は4本であり、ほかに遺構内から柱穴6基を確認した。しかし直接遺構に伴わない柱穴もここに含まれている。床面から1番深い支柱穴の深さは57cmである。時期を特定できる遺物が出土している。



第10図 II区2号竪穴住居跡実測図（1/60）

2号竪穴住居跡出土遺物（第11図1～8）

遺物1は須恵器坏蓋である。焼成は良好。色調は内外面とも淡青灰色で二次焼成を受けている。外面の調整はヘラ削りを残すほか、内外面とも回転ナデである。復元口径は約9.2cmである。

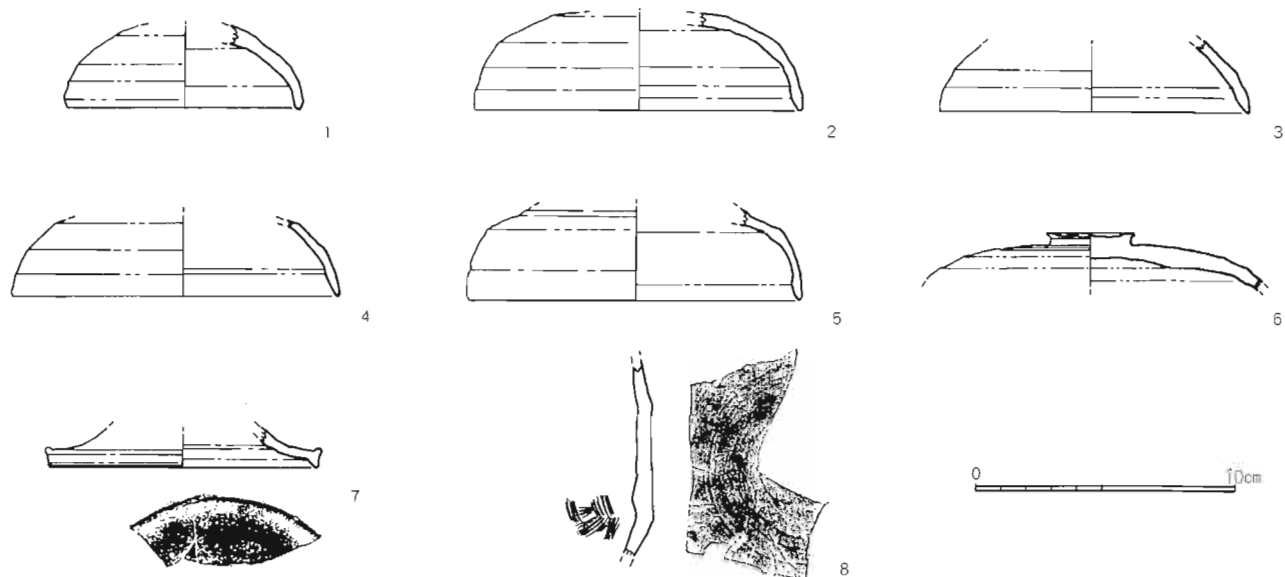
遺物2は須恵器坏蓋である。焼成は良好で、色調は淡灰色である。外面の調整はヘラ削りを残すほか、内外面とも回転ナデである。復元口径は約12.8cmで、全体の約1/4を残存する。

遺物3は須恵器坏蓋である。焼成は良好。色調は内外面とも淡青灰色で二次焼成を受けている。調整は内外面とも回転ナデである。復元口径は約11.9cmである。

遺物4は須恵器坏蓋である。焼成は良好。色調は淡灰色で二次焼成を受けている。調整は内外面とも回転ナデである。復元口径は約12.4cmである。

遺物5は須恵器坏蓋である。焼成は良好で、色調は白灰色である。外面の調整はヘラ削りを残すほか、上部はヘラ切り未調整で、内外面とも回転ナデである。復元口径は約11cmである。

遺物6は須恵器高坏の蓋か。焼成は良好。色調は内外面とも淡青灰色で二次焼成を受けている。調整は内外面とも回転ナデである。全体の約2/5を残存するが、復元口径は算出できず。



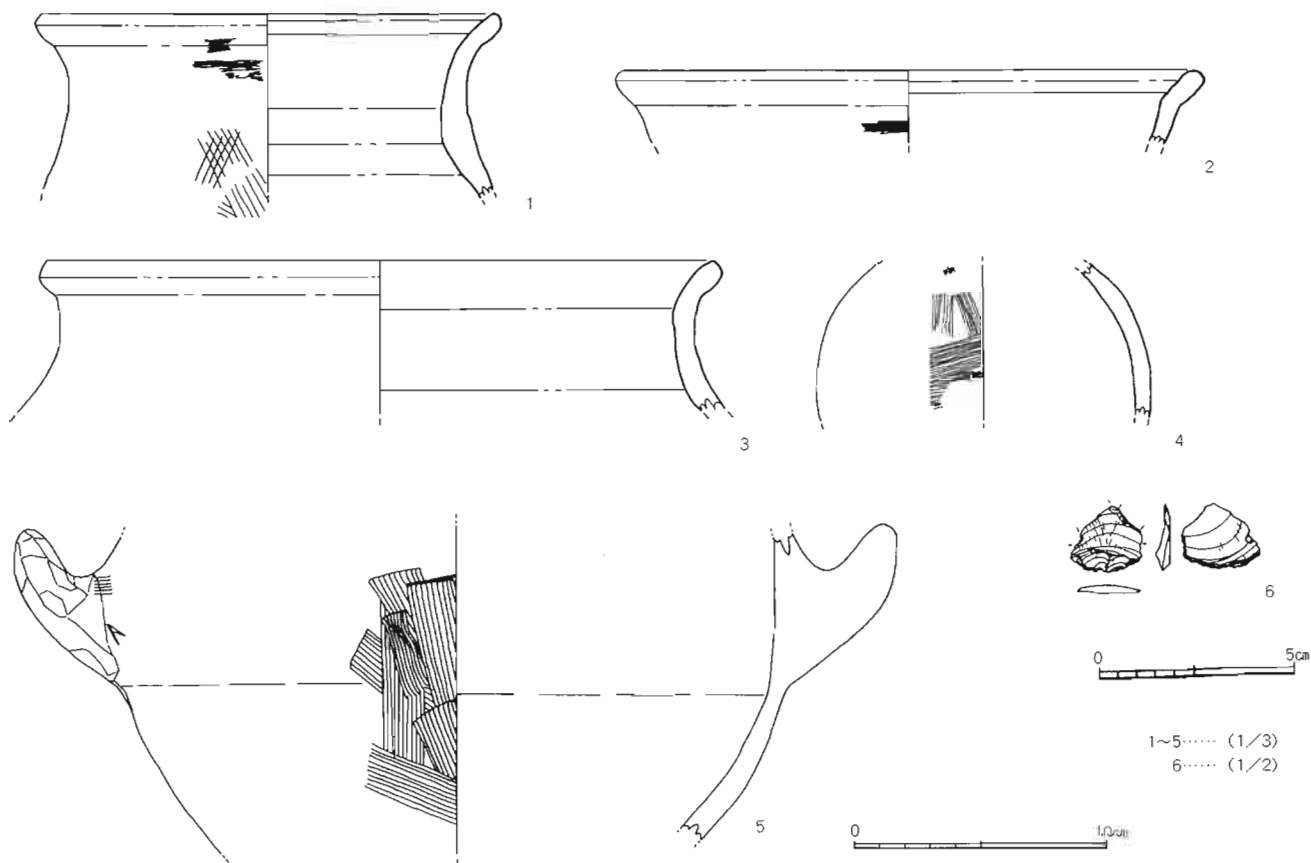
第11図 II区2号竪穴住居跡出土遺物 (1/3)

遺物7は須恵器高坏の脚部である。焼成は良好。色調は表裏面とも青灰色である。調整は内外面とも回転ナデで、脚部裏側にはヘラ記号がある。脚部の復元口径は約10.4cmである。

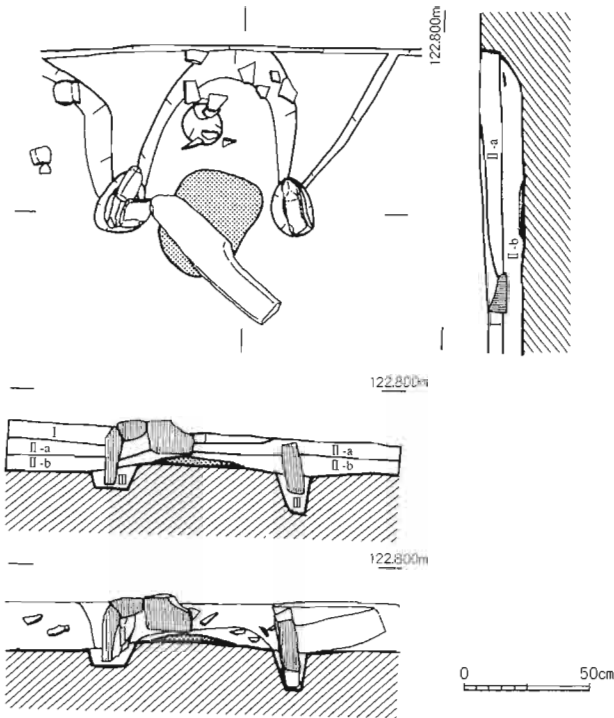
遺物8は提瓶の胴部である。胎土は白色砂粒が多く含まれている。焼成は良好。色調は内外面とも淡青灰色で二次焼成を受けている。外面の調整はヘラ削りを残すほか、内外面ともナデがある。

2号竪穴住居跡出土遺物 (第12図1～6)

遺物1は壺で、胎土には角閃石・長石・石英が含まれている。焼成は良好で、色調は内外面ともにおい褐色である。外面の調整は口縁部は横ナデで頸部から胴部にかけてカキ目仕上げで、内面は横ナデである。復元口径は約18.2cmである。



第12図 II区2号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/2・1/3)



第13図 II区2号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

遺物2は甕である。胎土には角閃石・石英が含まれている。焼成は良好で、色調は内外面とも淡黄橙色である。調整は内外面とも横ナデで、復元口径は約22.8cmである。

遺物3は甕である。胎土には角閃石・金雲母・長石を多く含み、焼成は不良で、色調は外面はにぶい褐色、内面は赤褐色である。内面は横ナデ調整、外面は磨滅しているため確認できず。復元口径は約26.4cmである。

遺物4は小型丸底壺の胴部である。胎土には角閃石・雲母を含み、焼成は良好で、色調は内外面ともい褐色である。外面の調整はハケ後不定方向ナデである。復元胴部径は約13.3cmである。

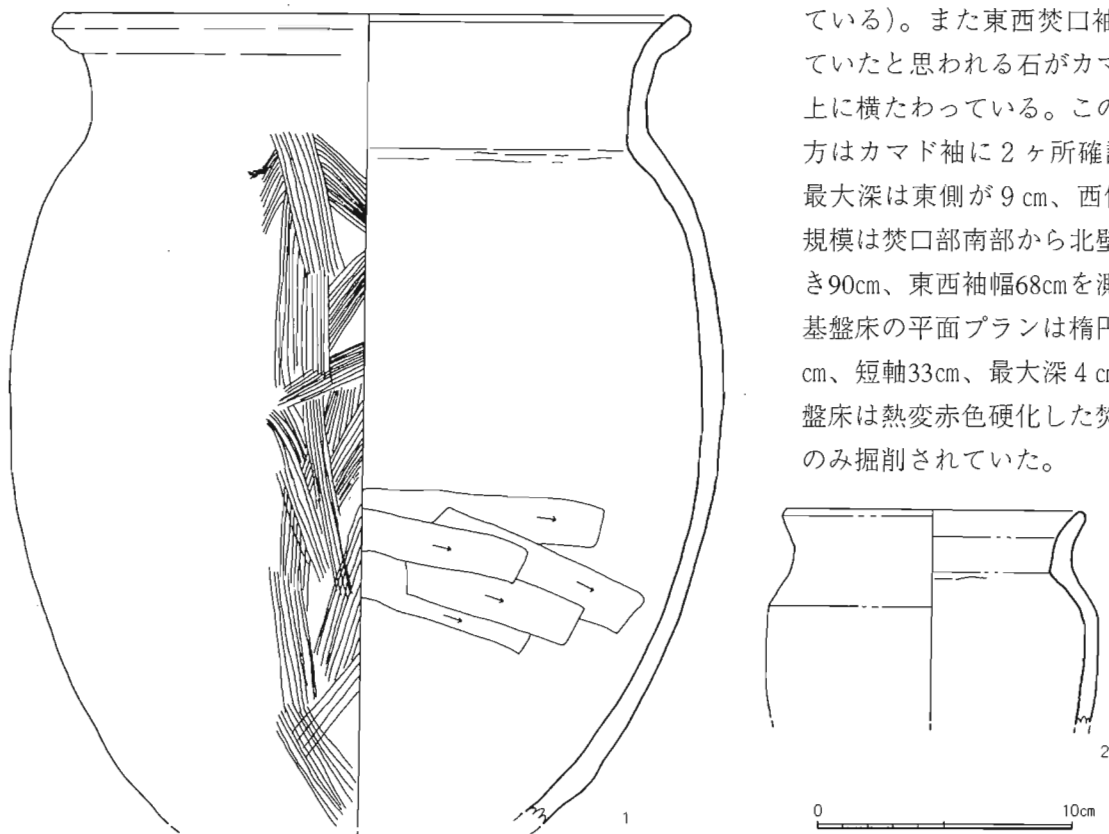
遺物5は甑である。胎土には角閃石・石英・約0.5cm程度の白色の石を含む。焼成は良好で、色

調は内外面ともい褐色である。外面は不定方向ハケ調整である。復元胴部径は約26.4cmである。

遺物6は使用痕剥片である。石材は黒曜石を使用している。下部には使用した痕跡が認められる。最大長1.7cm、最大幅1.9cm、最大厚0.4cm。

2号竪穴住居跡カマド (第13図)

このカマドは、住居北壁に付設されたものである。東西焚口袖石が残存する (支脚は既に抜かれている)。また東西焚口袖石に懸かっていたと思われる石がカマド基盤床の上に横たわっている。この袖石の掘り方はカマド袖に2ヶ所確認している。



第14図 II区2号竪穴住居跡カマド出土遺物実測図 (1/3)

また支脚周辺に遺物が多数出土していた。カマド内の埋土は、Ⅰ層：明茶褐色土層（炭化物を含む）、Ⅱ層 - a：暗茶褐色土層（粘りが有・焼土及び炭化物を含む）、Ⅱ層 - b：暗茶褐色土層（Ⅱ層 - aより焼土及び炭化物を多く含む）、Ⅲ層：茶褐色土層となっている。Ⅱ層 - a・bの中からは、多量の焼土及び炭化物が混入している部分があり、それらはカマドの内側の焼成を受けた部分が崩れたものと考えられる。

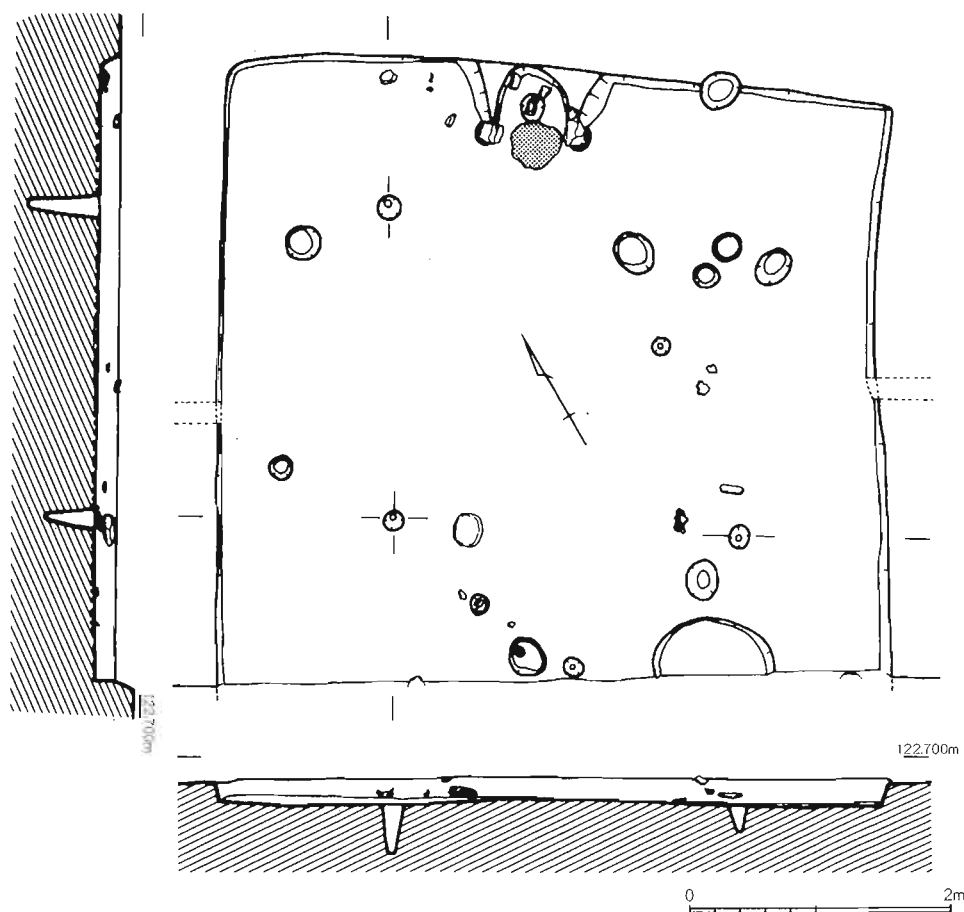
2号竪穴住居跡カマド出土遺物（第14図1・2）

遺物1は甕である。胎土には角閃石・長石・石英・雲母・赤色砂粒が含まれている。焼成は良好で、色調は内外面ともにぶい黄橙色をしており、外面は二次焼成を受けている。調整は内外面とも口縁部から頸部にかけて横ナデを行っており、外面胴部はハケ後縦ナデ及び不定方向ナデで、内面胴部はヘラ削りが施されている。復元口径は約24.1cm、復元胴部最大径は約27.8cmである。

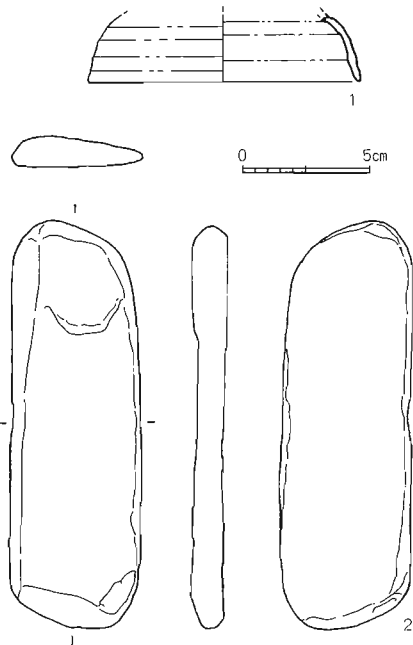
遺物2は壺である。胎土には角閃石・長石・石英・金雲母が含まれ、焼成は不良。色調は内外面とも赤褐色（カマド内出土）と暗茶褐色（カマド外出土）で、外面の調整は口縁部から頸部にかけて横ナデを行っている。胴部及び内面は磨滅しており不明。復元口径は約11.6cmである。

3号竪穴住居跡（第15図）

遺構は調査区のやや中央部南側に位置し、2号竪穴住居跡の南東に隣接しており、南壁は調査区外にあたるため確認できない。1・2号竪穴住居跡と同様に北壁のほぼ中央にカマドが付設されている。カマド内からはほとんど遺物が出土せず、遺構の南側から多く出土している。住居平面プランはほぼ方形と考えられ、規模は約4.95m + α × 5.20mで、床面の深さは16cm～20cmを測る。この遺構の主柱穴は4本であり、ほかに遺構内から土坑1基と柱穴11基を確認した。しかし遺構に伴わない柱穴がこの中には含まれている。床面から1番深い主柱穴の深さは55cmである。



第15図 II区3号竪穴住居跡実測図（1/60）



第16図 II区3号竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3)

3号竪穴住居跡出土遺物 (第16図 1・2)

遺物1は須恵器坏蓋である。焼成は良好で、色調は内外面とも淡灰色で二次焼成を受けたようである。外面はヘラ削りを残し上部にはヘラ切り未調整が見られるほか、内外面とも回転ナデである。復元口径は約10.6cmである。

遺物2は敲石である。石材は結晶片岩を使用している。最大長16.0cm、最大幅4.9cm、最大厚1.5cm。

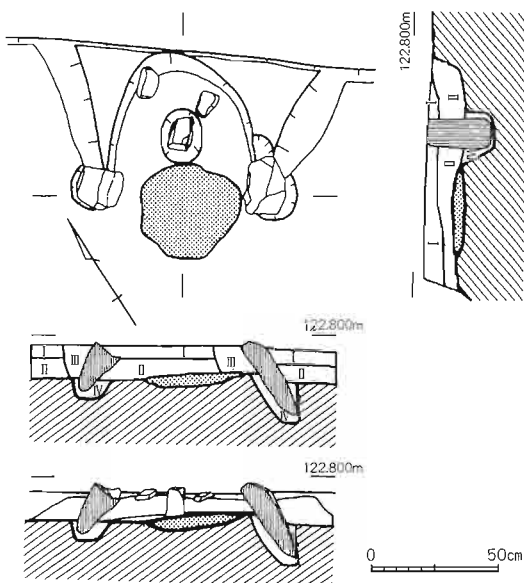
3号竪穴住居跡カマド (第17図)

このカマドは、住居北壁に付設されたものである。東西焚口袖石と支脚が残存する。西側焚口袖石は上部が折れている。この袖石の掘り方はカマド袖に2ヶ所確認している。最大深は東側が14cm、西側が8cmを測る。規模は焚口部南部から北壁までの奥行き81cm、東西袖幅65cmである。カマド基盤床の平面プランはほぼ円形で長軸39cm、短軸37cm、最大深6cmを測る。基盤床は熱変赤色硬化した焚燃部直下にのみ掘削されていた。また1・2号竪穴住居跡のように遺物は出土していない。

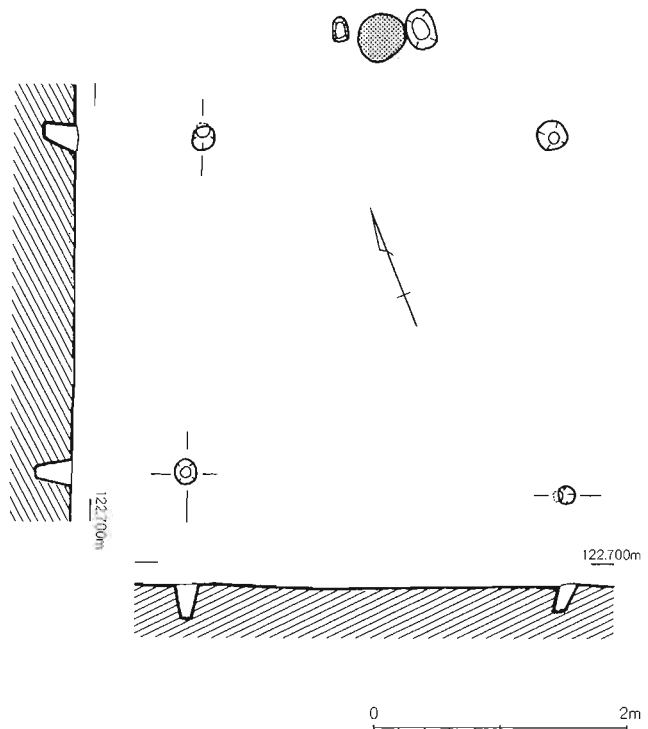
カマド内の埋土は、I層：明茶褐色土層（炭化物を含む）、II層：暗茶褐色土層（粘りが有・焼土及び炭化物を含む）、III層：黒褐色土層、IV層：茶褐色土層となっている。またII層中からは、多量の焼土及び炭化物が混入している部分があり、それらはカマドの内側の焼成を受けた部分が崩れたものと考えられる。

4号竪穴住居跡 (第18図)

この遺構は調査区の東端に位置し、プランは検出されなかったが、東西焚口袖石跡・カマド基盤床及び支柱穴4基を確認した。袖石の最大深は東側が8cm、西側が10cm、東西袖幅は66cmであり、カマド基盤床の平面プランは、ほぼ円形で長・短軸とも約40cmを測る。また1番深い支柱穴の深さは26cmである。



第17図 II区3号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)



第18図 II区4号竪穴住居跡実測図 (1/60)

1号掘立柱建物（第19図）

調査区の西側ほぼ中央にあり、 $2 + \alpha \times 4$ 間で構成されている。南側の柱穴は削平等を受けており検出されていない。規模は東西約 $7.65m + \alpha$ 、南北約 $5.10m$ で、検出面からの柱穴の深さは $28 \sim 48cm$ を測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

2号掘立柱建物及び出土遺物（第20図1）

1号掘立柱建物の南にあり、 2×4 間で構成され西・南側に庇を伴っている。規模は東西約 $8.15m$ 、南北約 $4.30m$ で、検出面からの深さは $7 \sim 36cm$ を測る。遺物1は弥生時代の壺の底部である。胎土には角閃石・長石・雲母が多数含まれている。焼成は不良、色調は内外面とも茶褐色で、復元底径は約 $11.2cm$ である。また遺構と遺物の時期は合わない。

3号掘立柱建物（第20図）

1号掘立柱建物の北東にあり、 2×2 間で構成されている。規模は東西約 $4.25m$ 、南北約 $5.50m$ で、検出面からの深さは $9 \sim 28cm$ を測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

4号掘立柱建物（第20図）

調査区の北西隅にあり、 $1 + \alpha \times 2 + \alpha$ 間で構成されている。規模は東西約 $39.5m + \alpha$ 、南北約 $2.40m + \alpha$ で、検出面からの深さは $12 \sim 15cm$ を測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

5号掘立柱建物（第20図）

調査区のほぼ中央付近にあり、2間分の柱穴があるだけ。他は検出できず。規模は東西約 $5.05m + \alpha$ 、検出面からの深さは $8 \sim 27cm$ を測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

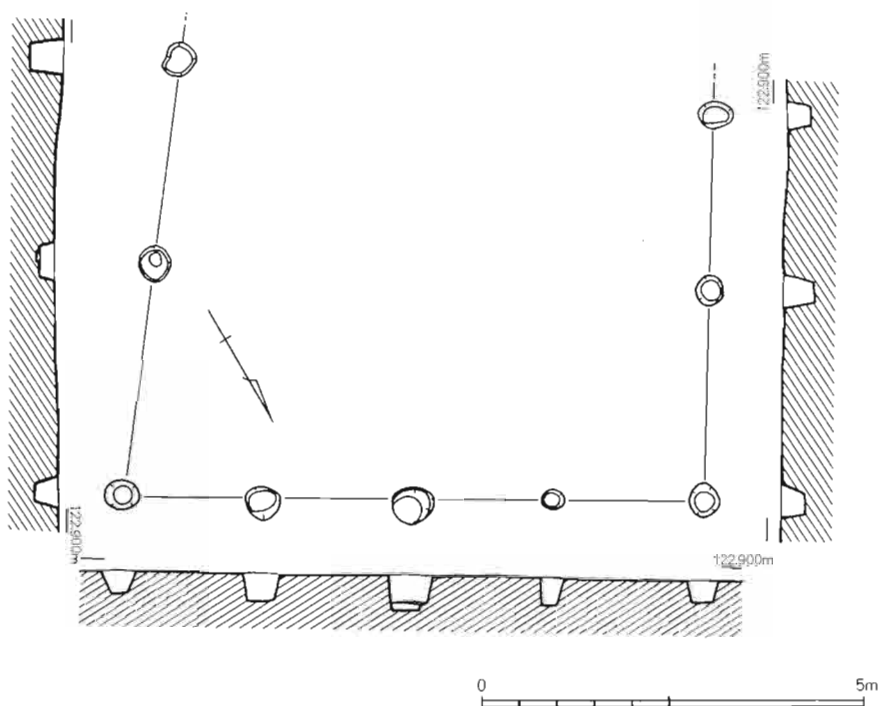
6号掘立柱建物及び出土遺物（第20図2）

1号竪穴住居跡に一部かかり、 $2 \times 1 + \alpha$ 間で構成されている。規模は東西約 $2.45m + \alpha$ 、南北約 $4m$ で、検出面からの深さは $12 \sim 31cm$ を測る。遺物2は土師質土器皿である。胎土には雲母・角閃石が含まれる。焼成はやや良で、色調は明褐色で、底部は糸切りがなされている。復元口径は約 $11.8cm$ 、復元底径は約 $9.6cm$ である。

7号掘立柱建物及び出土遺物（第21図1）

6号掘立柱建物の北東にあり、 $2 + \alpha \times 2 + \alpha$ 間で構成されている。規模は東西約 $5.75m + \alpha$ 、南北約 $5m + \alpha$ で、検出面からの深さは $28 \sim 35cm$ を測る。柱穴の中から1を出土した。

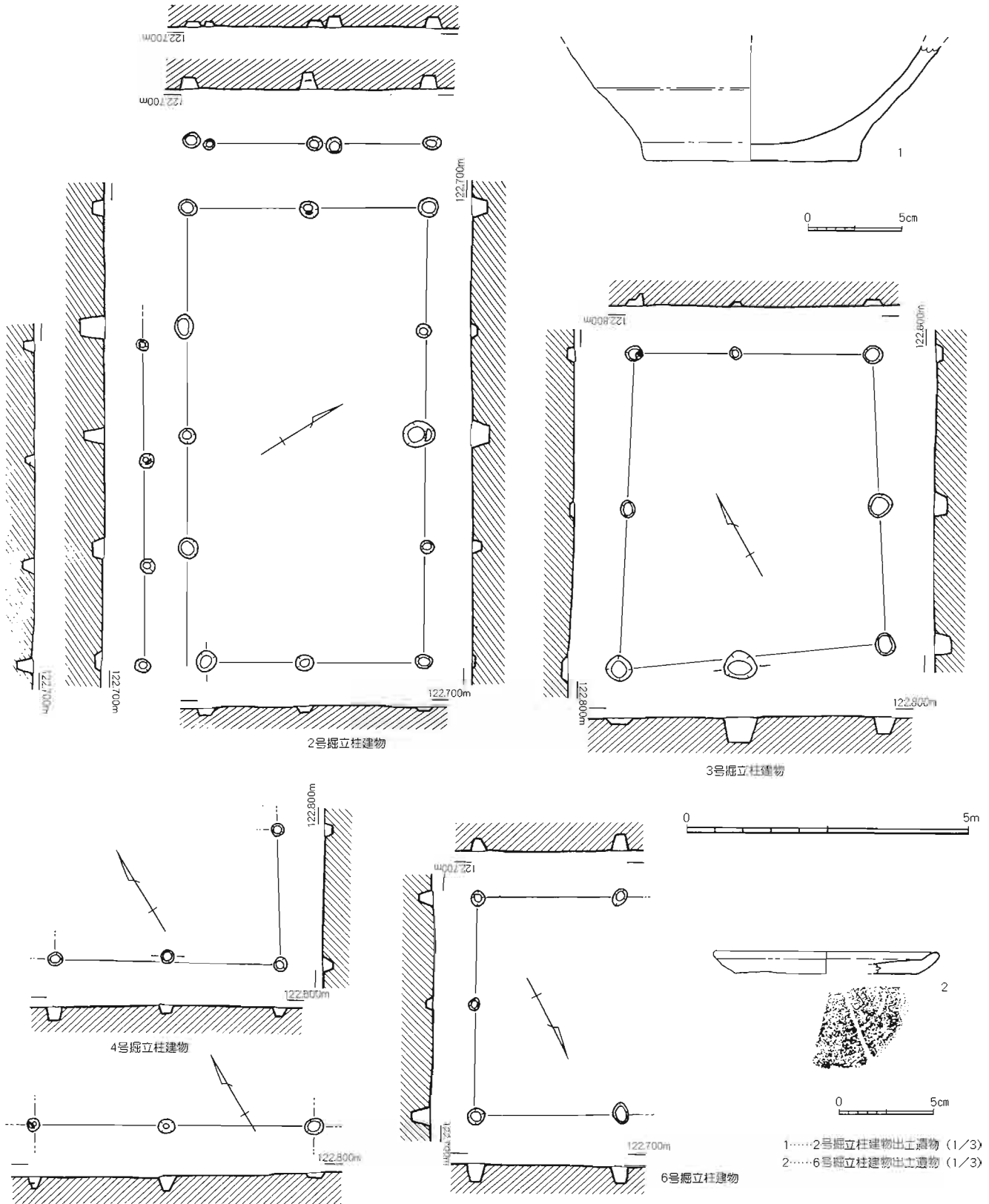
遺物1は白磁碗で、時期は12C後半のもので、内側に沈線が施されている。復元口径は約 $12.5cm$ である。



第19図 II区1号掘立柱建物跡実測図（1/100）

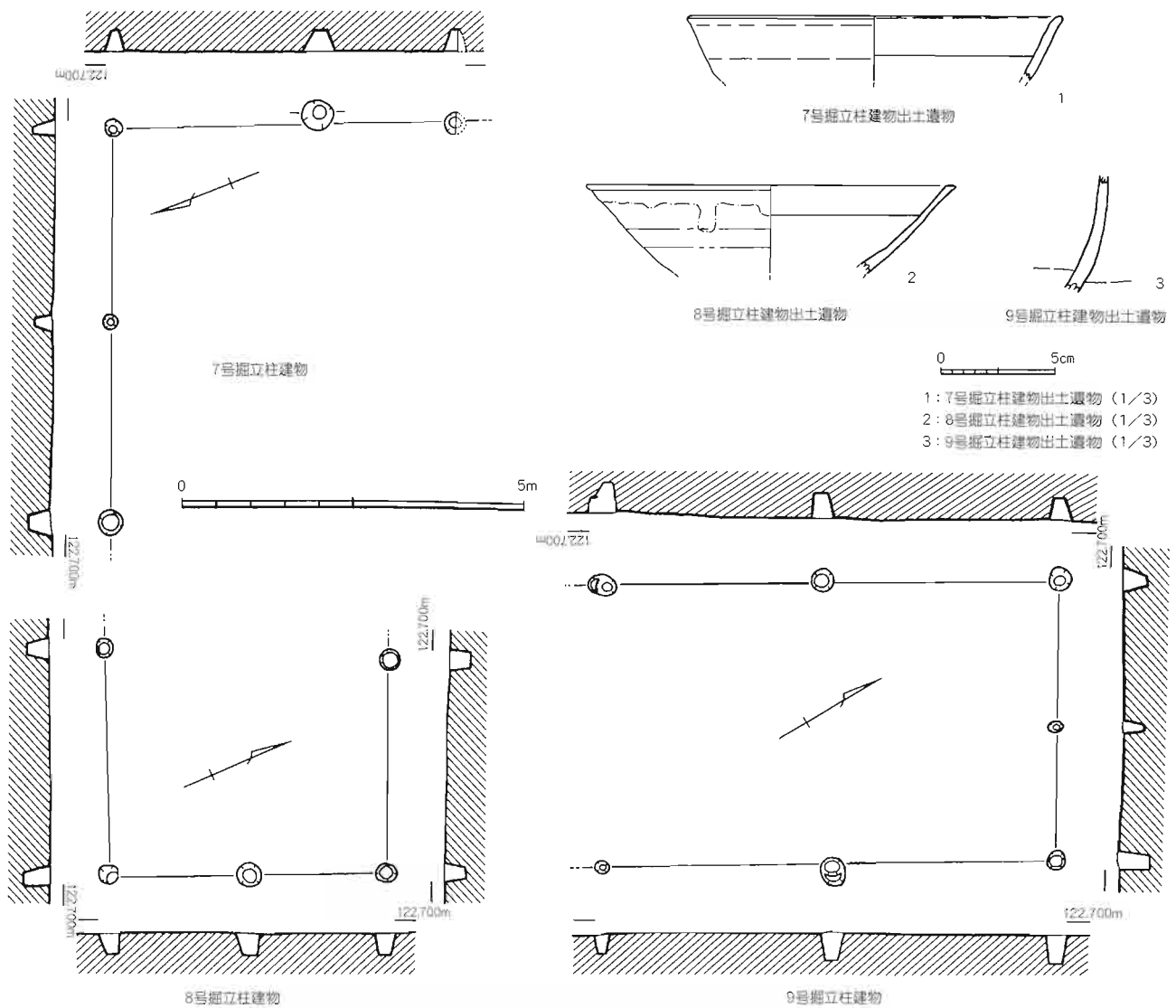
8号掘立柱建物及び出土遺物（第21図2）

7号掘立柱建物の内側にあり、1+α×2間で構成されている。規模は東西約3.10m+α、南北約4.10mで、検出面からの深さは31~40cmを測る。柱穴の中から2を出土した。遺物2は白磁碗で、時期は12C後半のもので、口縁部が外反している。復元口径は約16cmである。



1.....2号掘立柱建物出土遺物 (1/3)
2.....6号掘立柱建物出土遺物 (1/3)

第20図 II区2~6号掘立柱建物跡実測図 (1/100) 及び出土遺物実測図 (1/3)



第21図 II区7～9号掘立柱建物跡実測図（1/100）及び出土遺物実測図（1/3）

9号掘立柱建物及び出土遺物（第21図3）

1号竪穴住居跡に一部かかり、 $2 \times 2 + \alpha$ 間で構成されている。規模は東西約4.15m、南北約6.70m + α で、検出面からの深さは30～42cmを測る。柱穴の中からは白磁碗（3）が出土した。時期は12C～13Cのもので、底部内面に段を有する。

10号掘立柱建物（第22図）

2・3号竪穴住居跡に一部かかり、少なくとも 2×3 間で構成される。規模は東西約7.85m、南北約4.55mで、検出面からの深さは29～42cmを測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

11号掘立柱建物（第22図）

9号掘立柱建物と切り合い、東西に2間分確認できたのみで、南北は調査区外。規模は東西約4.74m、検出面からの深さは36～46cmを測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

12号掘立柱建物（第22図）

調査区の東側にあり、 2×3 間で構成されている。規模は東西約7.90m、南北約4.35m、検出面からの深さは24～41cmを測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

13号掘立柱建物（第23図）

調査区のほぼ中央北側にあり、3号溝状遺構を切る形で存在する。2×3間で構成され、東西側には柵列を有する。また南側にも柵列を有していた可能性がある。規模は東西約7.25m、南北約4.15m、検出面からの深さは11～32cmを測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

14号掘立柱建物（第23図）

13号掘立柱建物に一部が切り合い、3号溝状遺構を切る形で存在する。2×2間で構成されているが、一部削平を受けている部分がある。また北側に柵列を有する。規模は東西約5.65m、南北約4.15m、検出面からの深さは8～29cmを測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

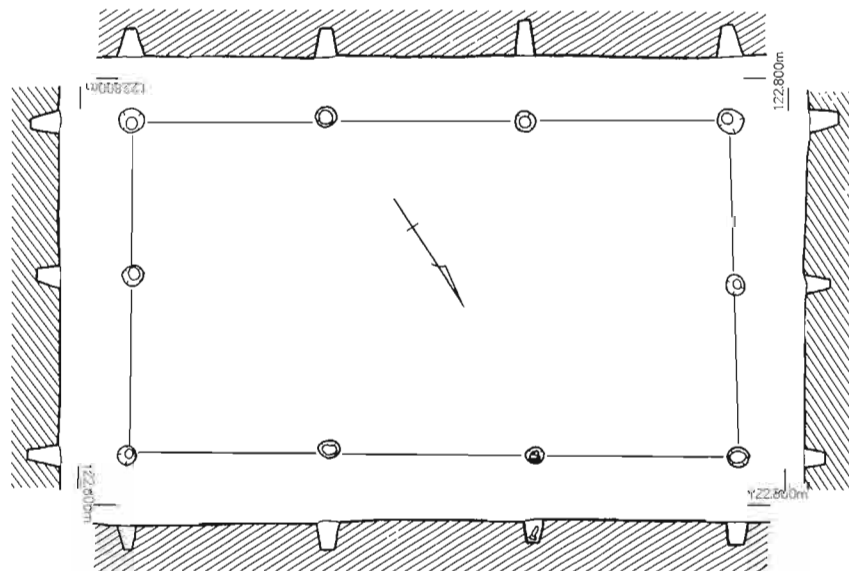
15号掘立柱建物（第23図）

14号掘立柱建物の南東側にあり、3号溝状遺構を切る形で存在する。2×2間で構成されている。規模は東西約3.65m、南北約2.30m、検出面からの深さは11～37cmを測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

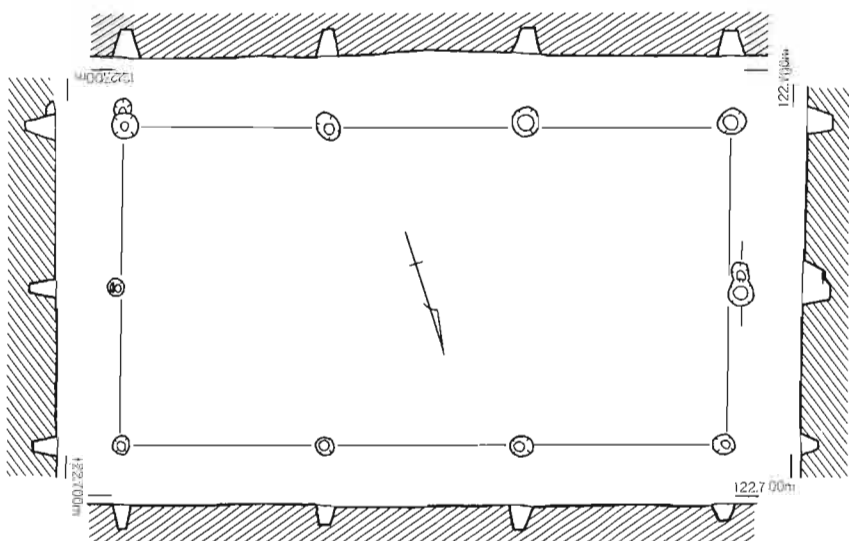
16号掘立柱建物（第24図）

調査区の北東側にあり、1×2間で構成されている。規模は東西約5.30m、南北約3.40m、検出面からの深さは8～13cmを測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

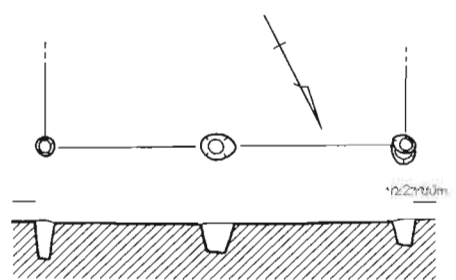
17号掘立柱建物（第24図）
16号建物の南東側にあり、3号溝状遺構を切る形で存在する。1+α×2間で構成されている。規模は東西約2.25m+α、南北約3.65m、検出面からの深さは12～27cmを測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。



10号掘立柱建物



12号掘立柱建物



11号掘立柱建物



第22図 II区10～12号掘立柱建物跡実測図（1/100）

18号掘立柱建物（第24図）

21号掘立柱建物と切り合い、 $2 + \alpha \times 3$ 間で構成されている。規模は東西約 $3.10m + \alpha$ 、南北約 $3.15m$ 、検出面からの深さは $14 \sim 37cm$ を測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

19号掘立柱建物（第24図）

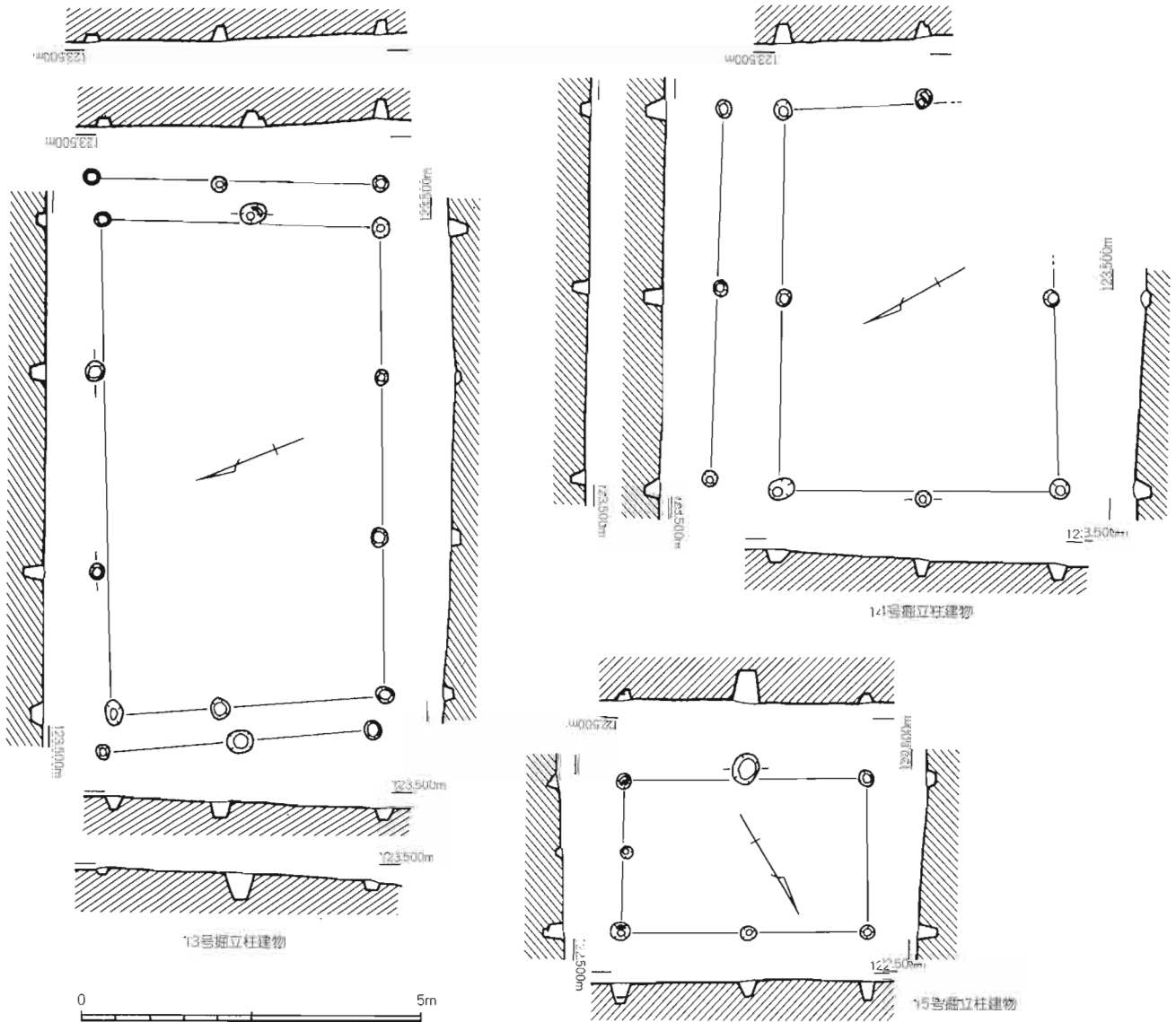
20号掘立柱建物と切り合い、一部削平等を受けている。 $2 \times 3 + \alpha$ 間で構成されている。規模は東西約 $5.10m$ 、南北約 $6.40m + \alpha$ 、検出面からの深さは $11 \sim 42cm$ を測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

20号掘立柱建物（第24図）

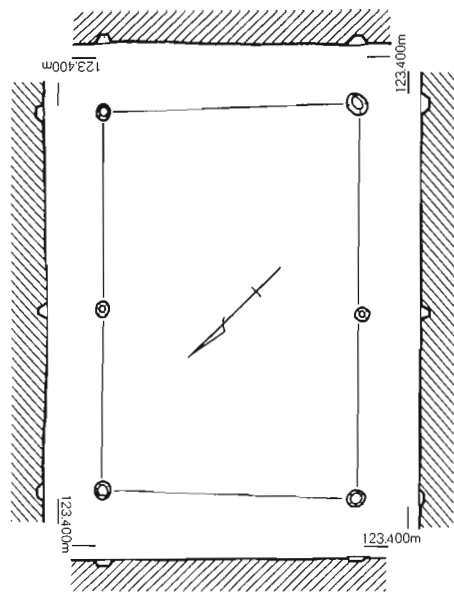
19号掘立柱建物と切り合い、 1×3 間で構成されている。規模は東西約 $4.40m$ 、南北約 $3.30m$ 、検出面からの深さは $8 \sim 29cm$ を測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。

21号掘立柱建物（第24図）

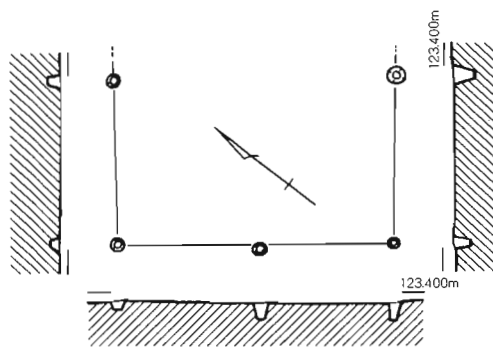
18号掘立柱建物と切り合い、東側は削平等を受けている。 $2 + \alpha \times 3$ 間で構成されている。規模は東西約 $3.10m + \alpha$ 、南北約 $3.90m$ 、検出面からの深さは $12 \sim 33cm$ を測る。柱穴の埋土中からは遺物は出土していない。



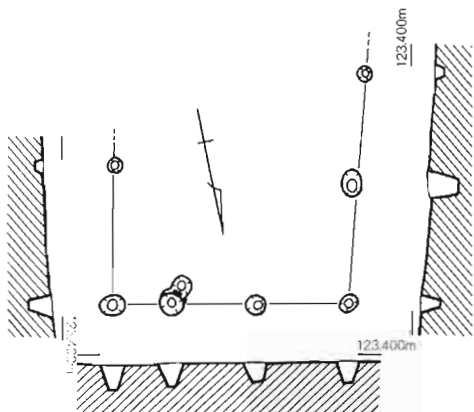
第23図 II区13～15号掘立柱建物跡実測図（1/100）



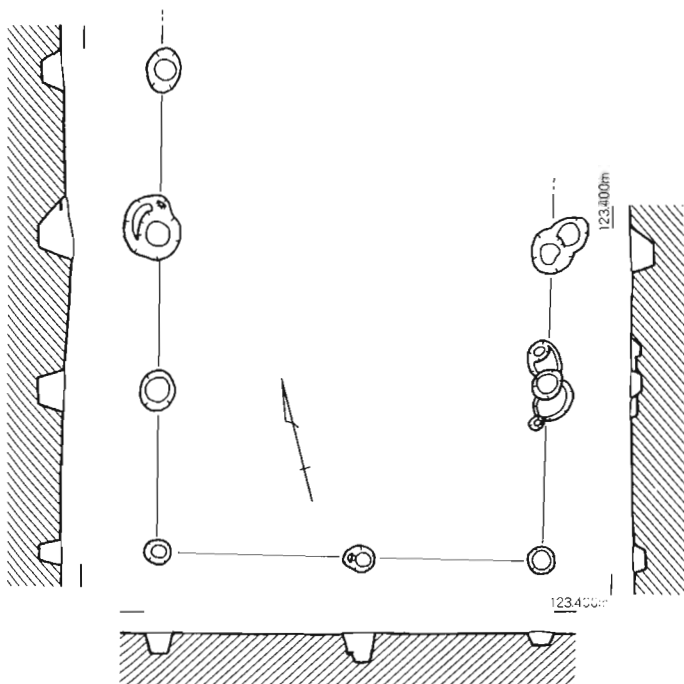
16号掘立柱建物



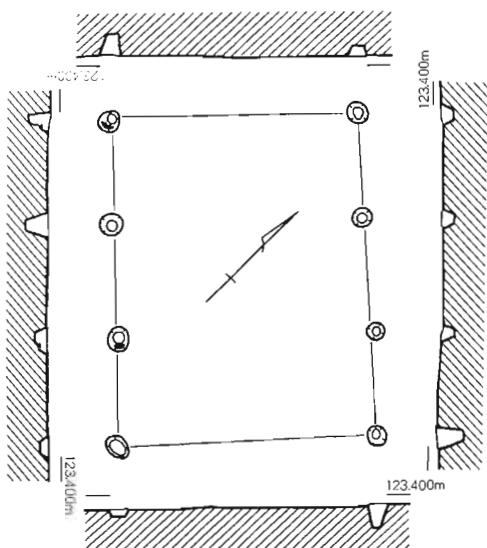
17号掘立柱建物



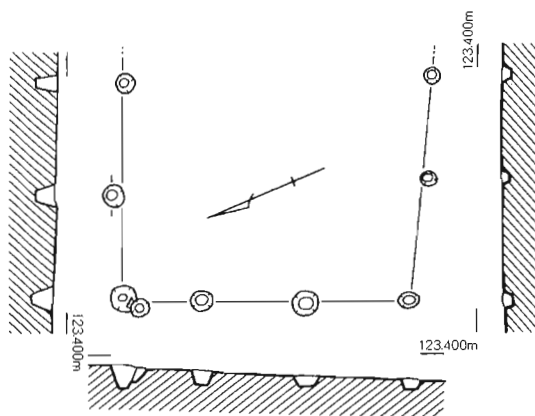
18号掘立柱建物



19号掘立柱建物



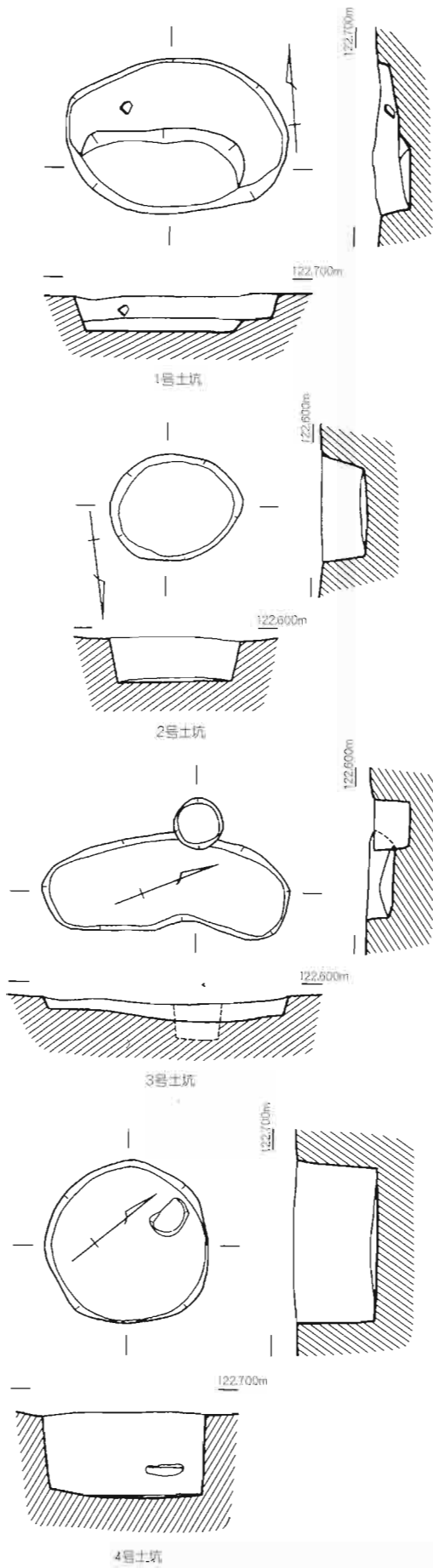
20号掘立柱建物



21号掘立柱建物



第24图 II区16~21号掘立柱建物跡実測图 (1/100)



1号土坑 (第25図)

楕円形で床面は2段掘りをなす土坑である。規模は長軸1.03m、短軸0.72m、深さ11~18cmを測る。遺物は茶褐色の土器片が出土している。

2号土坑 (第25図)

楕円形の土坑である。規模は長軸0.61m、短軸0.49m、深さ20cm前後を測る。埋土中からは遺物は出土していない。

3号土坑 (第25図)

楕円形で柱穴に切られている土坑である。規模は長軸1.13m、短軸0.39m、深さ6~11cmを測る。柱穴は長軸23cm、短軸24cmの円形で、深さ11cm前後を測る。埋土中からは遺物は出土していない。

4号土坑 (第25図)

円形の土坑である。規模は長・短軸とも0.75m、深さ35~38cmを測る。遺構内の北側には楕円状の石が入っていたが、埋土中からは遺物は出土していない。

5号土坑 (第25図)

楕円形で柱穴に切られている土坑である。規模は長軸0.96m、短軸0.80m、深さ31~35cmを測る。柱穴は長軸42cm、短軸26cmの楕円形で、深さ11~19cmを測る。埋土中からは遺物は出土していない。

6号土坑 (第26図)

隅丸長方形を呈し、床面は2段掘りをなす土坑である。規模は長軸1.94m、短軸1.18m、深さ29~43cmを測る。床面直上付近に遺物や礫がないため流れ込みと思われる。遺物は幕末~近代にかけての陶磁器の小片が出土した。

第25図 II区1~5号土坑実測図 (1/30)

7号土坑（第26図）

楕円形で内部に小ピットを3個を有する土坑である。規模は長軸0.93m、短軸0.46m、深さ6～10cmを測る。小ピットの深さは床面から4cm前後である。埋土中からは遺物は出土していない。

8号土坑（第26図）

隅丸長方形で床面はほぼ平坦な土坑である。規模は長軸0.98m、短軸0.60m、深さ30cm前後を測る。遺物にはぶい褐色の小土器片が出土している。

9号土坑（第26図）

ほぼ円形で床面はほぼ平坦な土坑である。規模は長軸0.68m、短軸0.69m、深さ16cm前後を測る。埋土中からは遺物は出土していない。

10号土坑（第26図）

楕円形で床面は2段掘りをなす土坑である。規模は長軸2.60m、短軸1.74m、深さ55～91cmを測る。遺構内1段目の床面周辺には数個の礫を伴っており、埋土中からは暗褐色の小土器片が出土している。

11号土坑（第26図）

楕円形の土坑である。規模は長軸0.88m、短軸0.62m、深さ6～12cmを測る。遺構内の東側にはほぼ長方形の礫が含まれていた。埋土中からは遺物は出土していない。

12号土坑（第26図）

隅丸長方形で床面はほぼ平坦な土坑である。規模は長軸0.91m、短軸0.55m、深さ20cm前後を測る。遺構内には大小合わせて十数個の礫を含んでいる。遺物は暗褐色の小土器片が出土している。

13号土坑（第26図）

楕円形の土坑である。規模は長軸0.73m、短軸0.62m、深さ10～13cmを測る。埋土中からは遺物は出土していない。

14号土坑（第27図）

隅丸長方形で東側に柱穴を有する土坑である。規模は柱穴を含めた長軸1.56m、短軸0.74m、深さ6～12cmを測る。柱穴の深さは49cm前後で、底に偏平な礫を有している。また土坑の南側には数個の礫が含まれ、遺物は明褐色の小土器片が出土している。

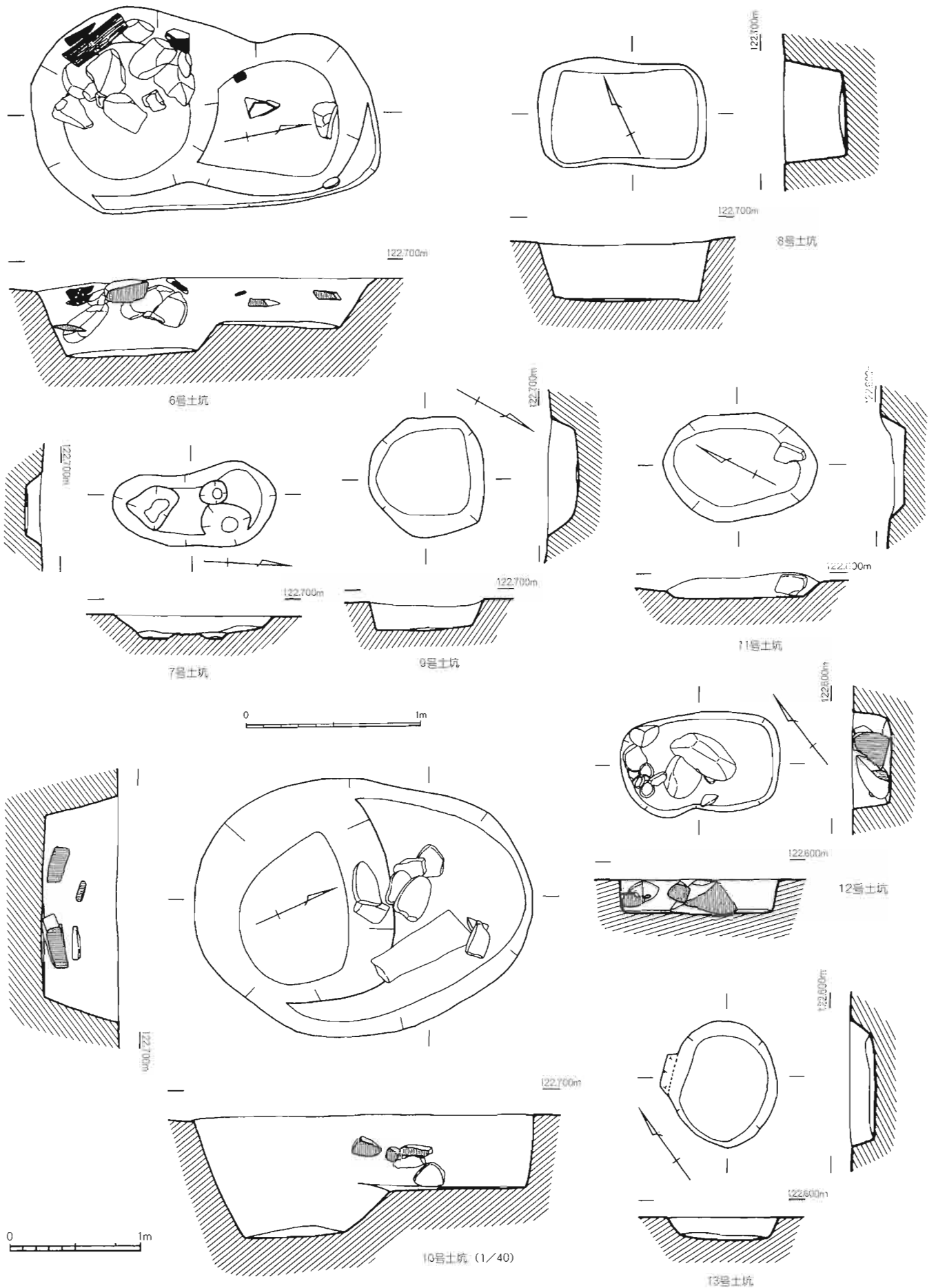
15号土坑及び出土遺物（第27図1～4）

ほぼ隅丸正方形の土坑である。規模は長軸0.99m、短軸0.87m、深さ25～29cmを測る。遺構内には大小様々な礫が数多く敷き詰められていた。遺構の東側の礫は土層確認のため取り出した。

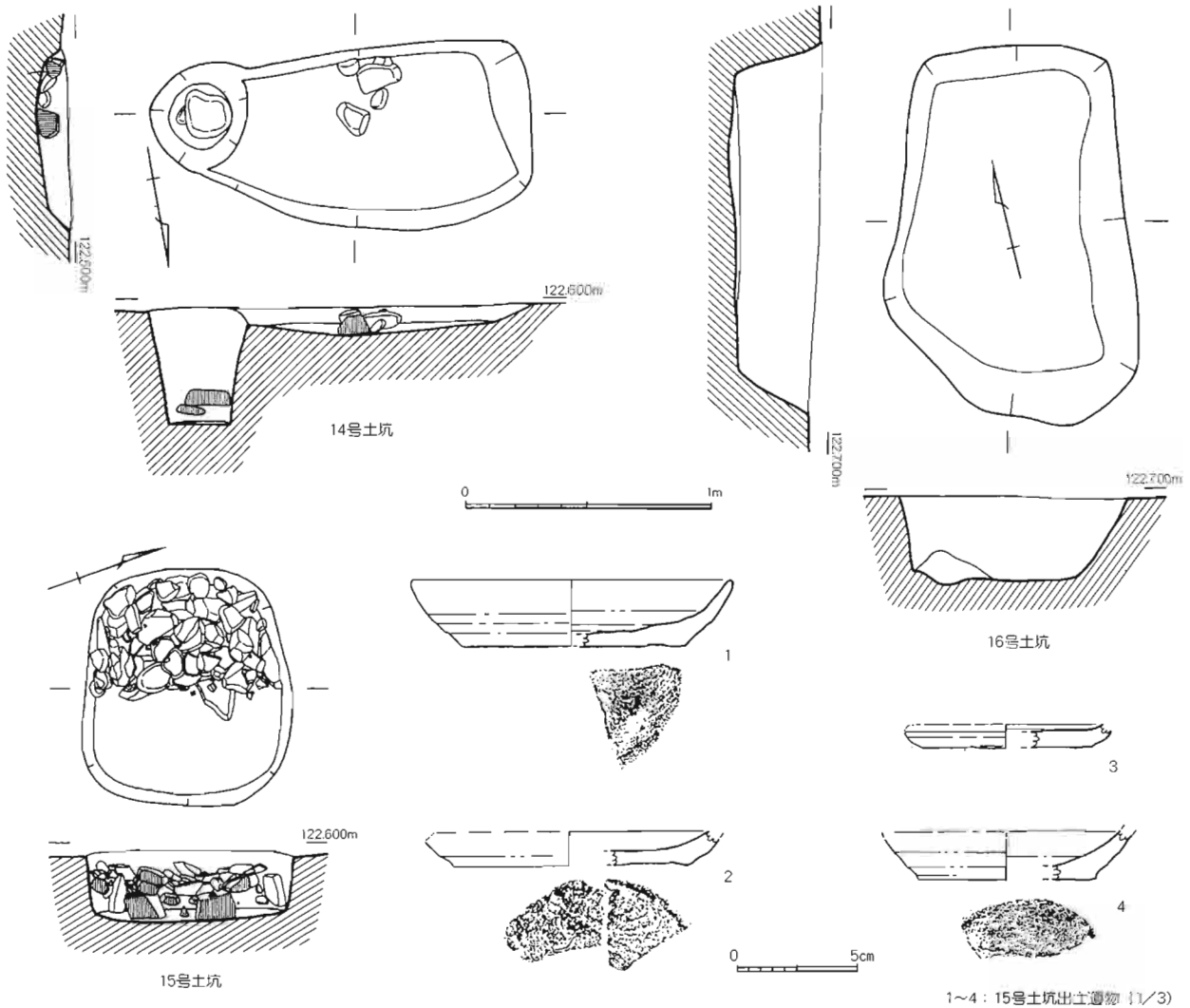
遺物1は土師質土器皿である。胎土には角閃石・雲母が含まれている。焼成は良で、色調は内外面ともぶい褐色である。底部は糸切りが施され、外面はヘラ削りが行われている。復元口径は約12.4cm、復元底径は約9.2cmである。

遺物2は土師質土器皿である。胎土には角閃石・長石・石英・雲母・赤色砂粒が含まれている。焼成は良で、色調は内面がぶい褐色、外面は暗褐色で二次焼成を受けている。底部は糸切りが施され、外面はヘラ削りが行われている。復元底径は約9.5cmである。

遺物3は土師質土器皿である。胎土には角閃石・石英・雲母・赤色砂粒が含まれている。焼成は良好で、焼成は内外面とも明褐色で二次焼成を受けている。底部は糸切りが施されている。復元底径は約7.2cmである。



第26图 II区6~13号土坑实测图 (1/30 · 1/40)



第27図 II区14～16号土坑実測図（1/30）及び出土遺物実測図（1/3）

遺物4は土師質土器皿である。胎土には角閃石・長石・石英・雲母・赤色砂粒が含まれている。焼成は良好で、焼成は内面が明褐色で、外面は赤褐色で一部二次焼成を受けている部分がある。底部は糸切りが施され、外面はヘラ削りが行われている。復元底径は約7.4cmである。

16号土坑（第27図）

ほぼ隅丸長方形の土坑である。床面は平坦でなく起伏にとんでいる。規模は長軸2.07m、短軸1.28m、深さ31～51cmを測る。遺物は暗褐色の小土器片が出土している。

17号土坑（第28図）

楕円形で床面は2段掘りをなす土坑である。規模は長軸1.03m、短軸0.63m、深さ8～43cmを測る。埋土中からは遺物は出土していない。

18号土坑（第28図）

ほぼ円形で床面は2段掘りをなす土坑である。規模は長軸1.07m、短軸1.05m、深さ6～33cmを測る。2段目の床面周辺には大小合わせて十数個の礫を含んでいる。遺物にはおい褐色の小土器片が出土している。

19号土坑（第28図）

不定形で床面は3段掘りをなす土坑である。規模は長軸2.39m、短軸0.94m、深さ5～16cmを測る。遺構内の西側に楕円形の礫を含む。埋土中からは遺物は出土していない。

20号土坑（第28図）

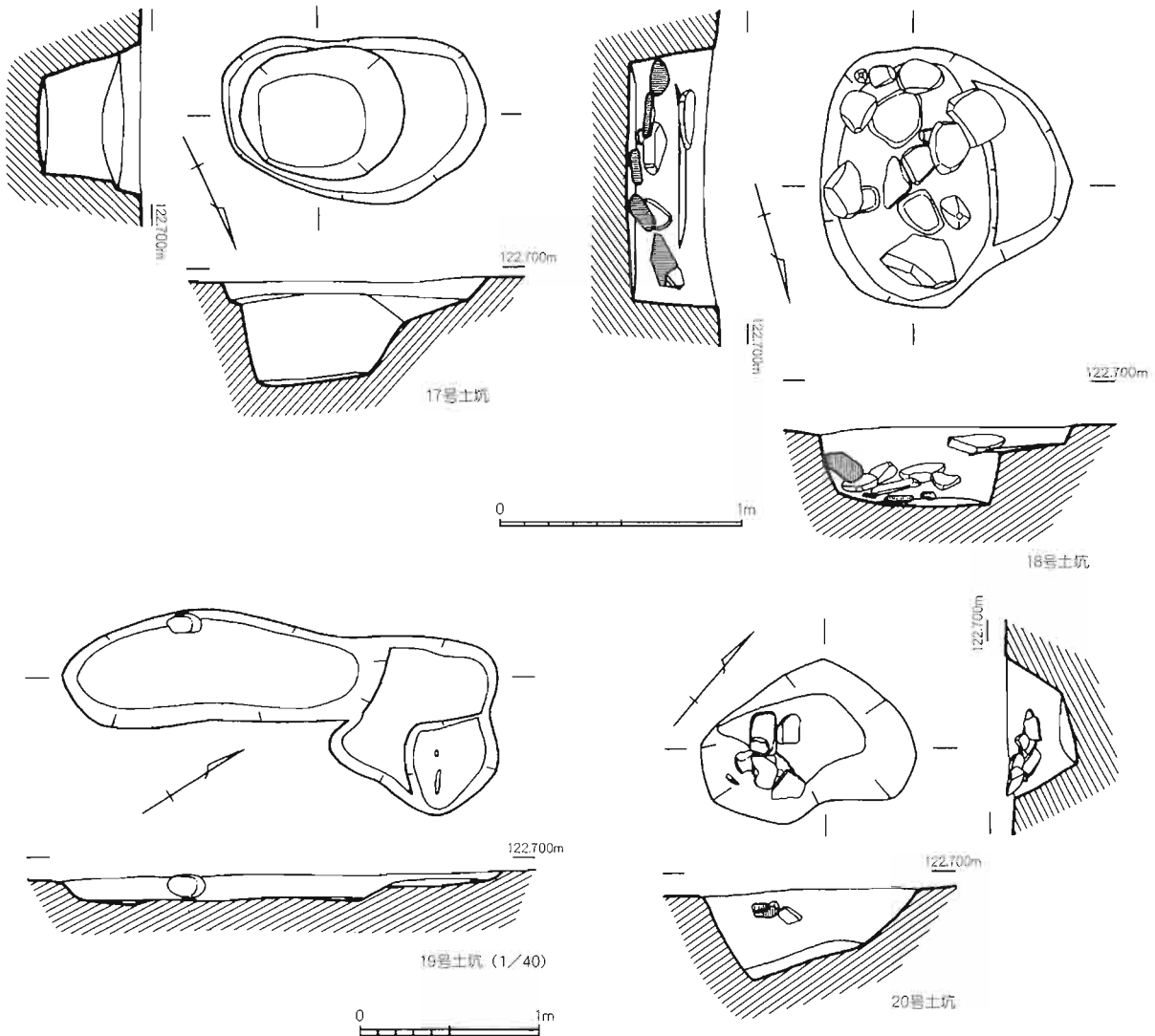
不定形な土坑である。床面は平坦でなく起伏にとんでいる。規模は長軸0.90m、短軸0.59m、深さ24～36cmを測る。遺構内の南側に大小合わせて数個の礫を含んでいる。埋土中からは遺物は出土していない。

21号土坑（第29図）

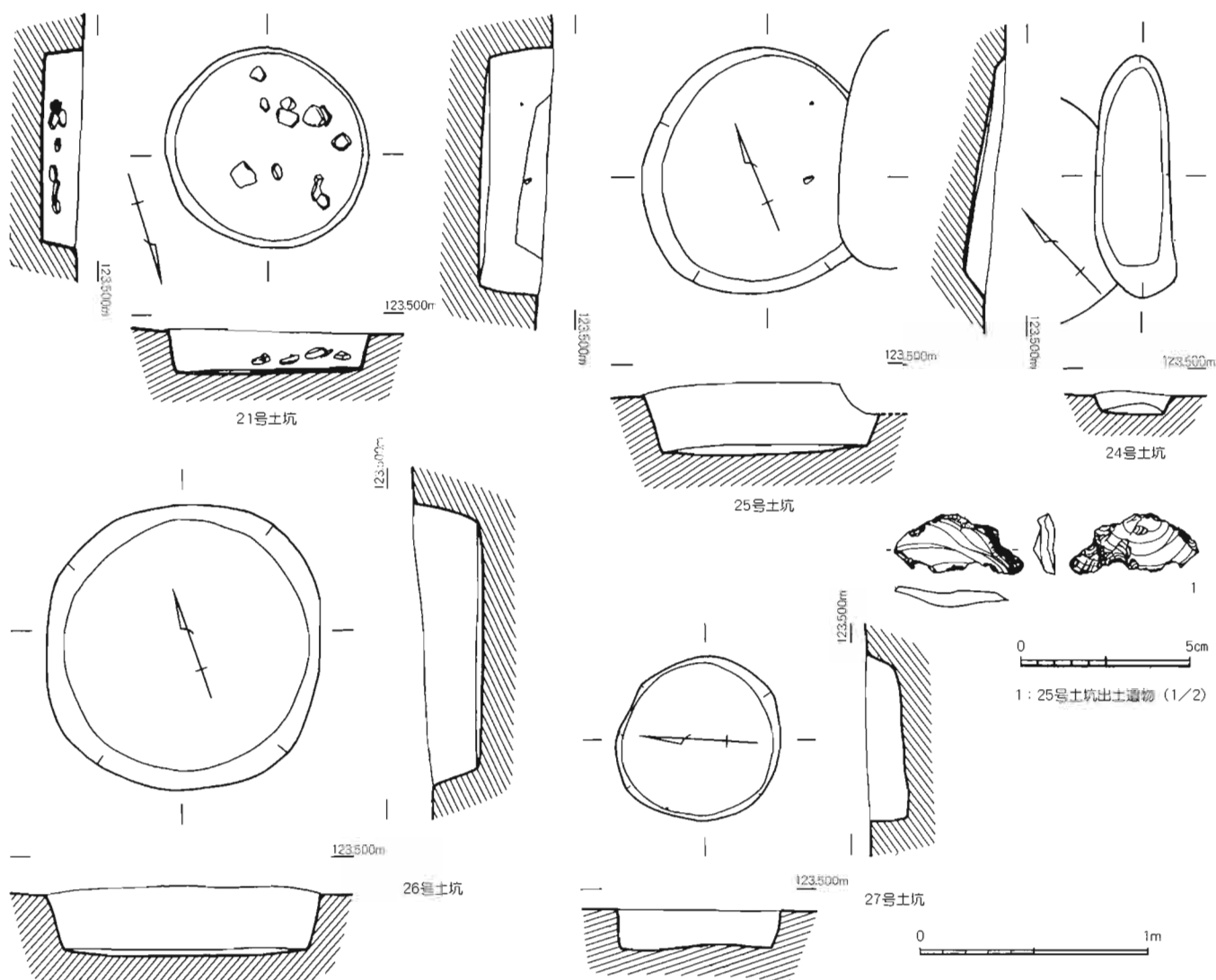
円形で床面はほぼ平坦な土坑である。規模は長軸0.88m、短軸0.87m、深さ18cm前後を測る。遺構内中央を中心に大小合わせて十数個の礫を含んでいる。遺物は暗褐色の小土器片が出土している。

24号土坑（第29図）

楕円形で25号土坑を切っている土坑である。規模は長軸1.06m、短軸0.32m、深さ5～10cmを測る。



第28図 II区17～20号土坑実測図（1/30・1/40）



第29図 II区21・24～27号土坑実測図（1/30）及び出土遺物実測図（1/2）

る。埋土中からは遺物は出土していない。

25号土坑及び出土遺物（第29図1）

ほぼ円形で24号土坑に切られる土坑である。規模は長軸1.08m、短軸1.02m、深さ16～27cmを測る。遺物1は二次加工剥片である。石材は黒曜石を使用している。ポジ面左端部を調整しようとした痕跡が見られる。最大長3.5cm、最大幅1.6cm、最大厚0.6cm。その他の遺物としては、明褐色の小土器片が出土している。

26号土坑（第29図）

ほぼ円形の土坑である。規模は長軸1.25m、短軸1.21m、深さ20～31cmを測る。埋土中からは遺物は出土していない。

27号土坑（第29図）

円形の土坑である。規模は長軸0.71m、短軸0.70m、深さ14～18cmを測る。埋土中からは遺物は出土していない。

28号土坑（第30図）

楕円形で床面はほぼ平坦な土坑である。規模は長軸0.68m、短軸0.39m、深さ13cm前後を測る。

遺物はにぶい褐色の小土器片が出土している。

29号土坑（第30図）

楕円形で床面はほぼ平坦な土坑である。規模は長軸0.62m、短軸0.40m、深さ9cm前後を測る。埋土中からは遺物は出土していない。

30号土坑（第30図）

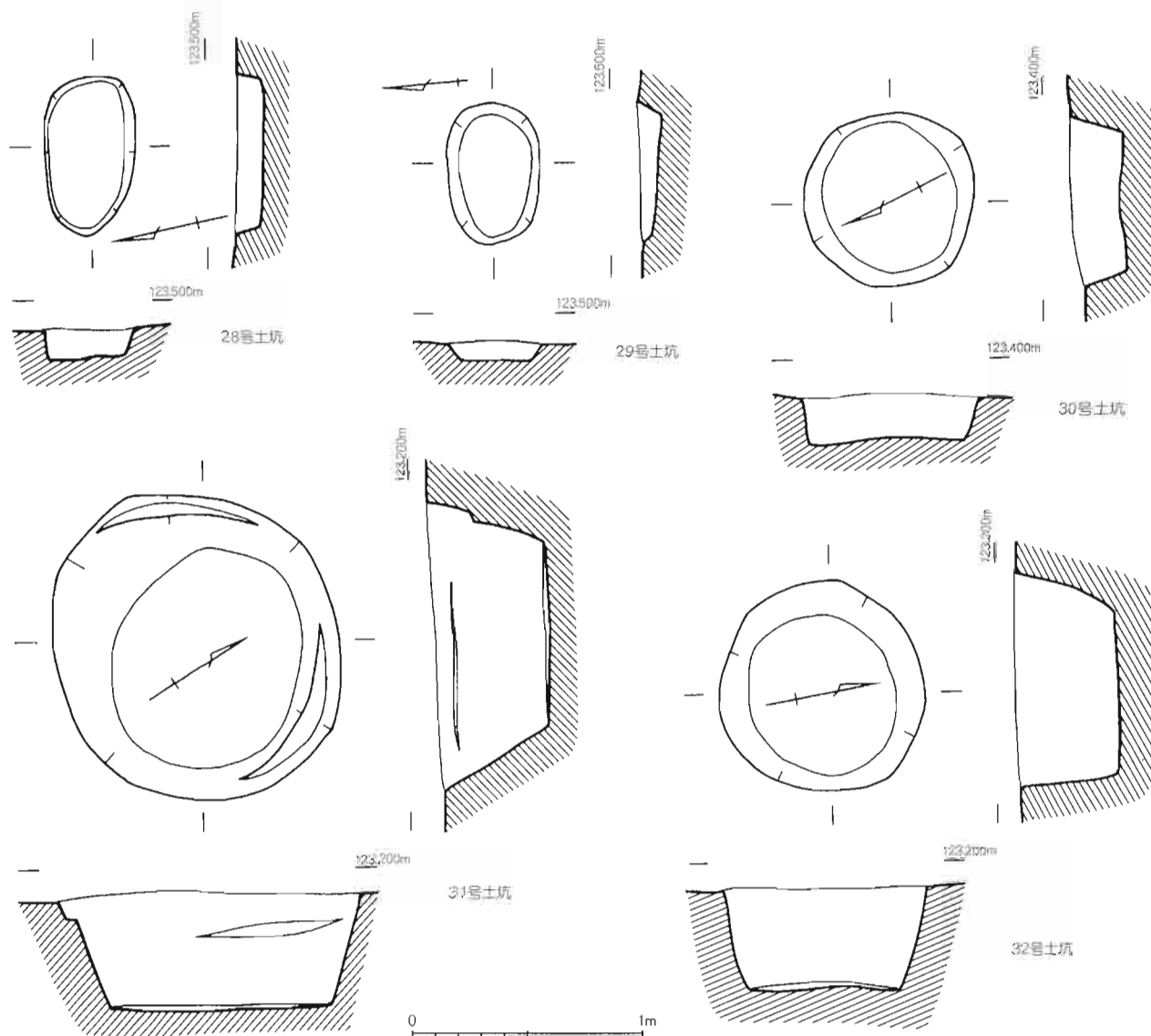
円形の土坑である。規模は長軸0.73m、短軸0.71m、深さ18～23cmを測る。遺物はにぶい褐色の小土器片が出土している。

31号土坑（第30図）

ほぼ円形でテラスを有し、床面はほぼ平坦な土坑である。規模は長軸1.29m、短軸1.25m、深さ51cm前後を測る。埋土中からは遺物は出土していない。

32号土坑（第30図）

ほぼ円形の土坑である。規模は長軸0.91m、短軸0.89m、深さ39～43cmを測る。遺物は明褐色の



第30図 II区28～32号土坑実測図（1/30）

小土器片が出土している。

33号土坑 (第31図)

ほぼ円形の土坑である。床面は平坦でなく起伏にとんでいる。規模は長軸0.72m、短軸0.66m、深さ9~15cmを測る。遺物にはぶい褐色の小土器片が出土している。

34号土坑 (第31図)

楕円形の土坑である。規模は長軸0.86m、短軸0.77m、深さ25~29cmを測る。遺物は茶褐色の小土器片が出土している。

35号土坑 (第31図)

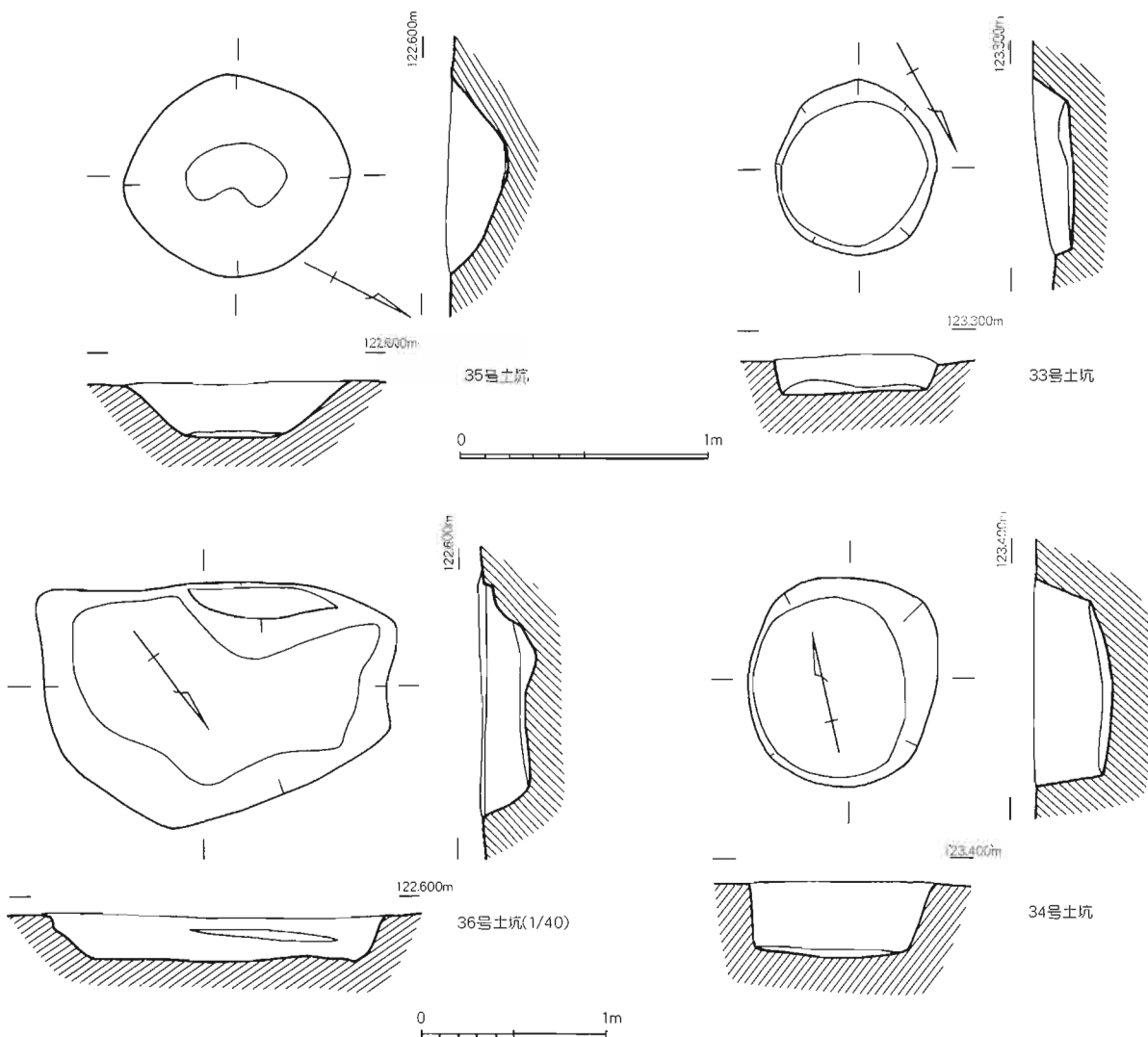
楕円形の土坑である。規模は長軸0.91m、短軸0.83m、深さ23cm前後を測る。遺物にはぶい褐色の小土器片が出土している。

36号土坑 (第31図)

不定形で床面は2段掘りをなす土坑である。規模は長軸1.81m、短軸1.31m、深さ7~25cmを測る。埋土中からは遺物は出土していない。

37号土坑 (第32図)

楕円形で柱穴に切られている土坑である。規模は長軸0.96m、短軸0.79m、深さ7~10cmを測る。柱穴は長軸33cm、短軸29cmの楕円形で、深さ9~12cmを測る。遺物にはぶい褐色の小土器片が出土



第31号 II区33~36号土坑実測図 (1/30・1/40)

している。

38号土坑（第32図）

楕円形で床面は2段掘りをなす土坑である。規模は長軸0.66m、短軸0.52m、深さ6～18cmを測る。遺物は暗褐色の小土器片が出土している。

39号土坑（第32図）

不定形な土坑である。規模は長軸1.14m、短軸0.79m、深さ16～21cmを測る。遺構内から河原石・凝灰岩・軽石等の礫を多数含んでおり、遺物は褐色・にぶい褐色の小土器片が出土している。

40号土坑（第32図）

不定形で柱穴に切られている土坑である。規模は長軸0.96m、短軸0.84m、深さ4～10cmを測る。柱穴は径24cm、深さ37cmを測る。埋土中からは遺物は出土していない。

41号土坑及び出土遺物（第32図1）

楕円形で床面は2段掘りをなす土坑である。規模は長軸0.87m、短軸0.80m、深さ14～30cmを測る。遺物1は12C代の玉縁口縁の白磁である。

42号土坑（第32図）

隅丸長方形の土坑である。規模は長軸3.94m、短軸2.36m、深さ45～51cmを測る。遺構内から河原石・凝灰岩等の礫を多数含んでいたが、遺物は出土しなかった。

43号土坑（第32図）

楕円形で44号土坑に切られている土坑である。規模は長軸 $1.05m + \alpha$ 、短軸1.04m、深さ65～68cmを測る。埋土中からは遺物は出土していない。

44号土坑（第32図）

ほぼ円形で床面は2段掘りをなし、43号土坑を切っている土坑である。規模は長軸0.58m、短軸0.55m、深さ56～72cmを測る。遺物は暗褐色の小土器片が出土している。

45号土坑（第34図）

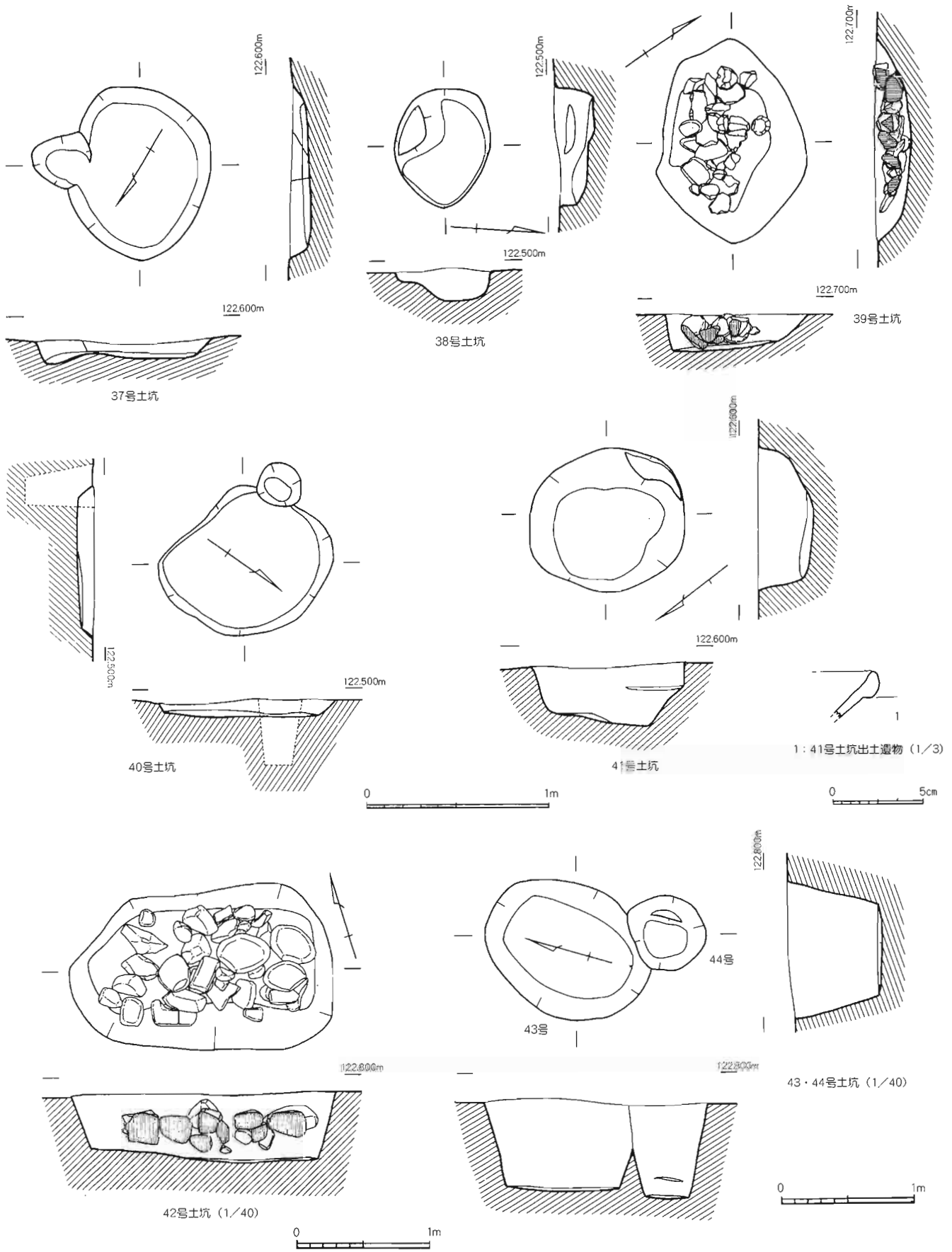
楕円形で1号井戸と46号土坑に切られている土坑である。規模は長軸 $0.59m + \alpha$ 、短軸0.36m、深さ25cm前後を測る。遺物は褐色・茶褐色の小土器片が出土している。

46号土坑（第34図）

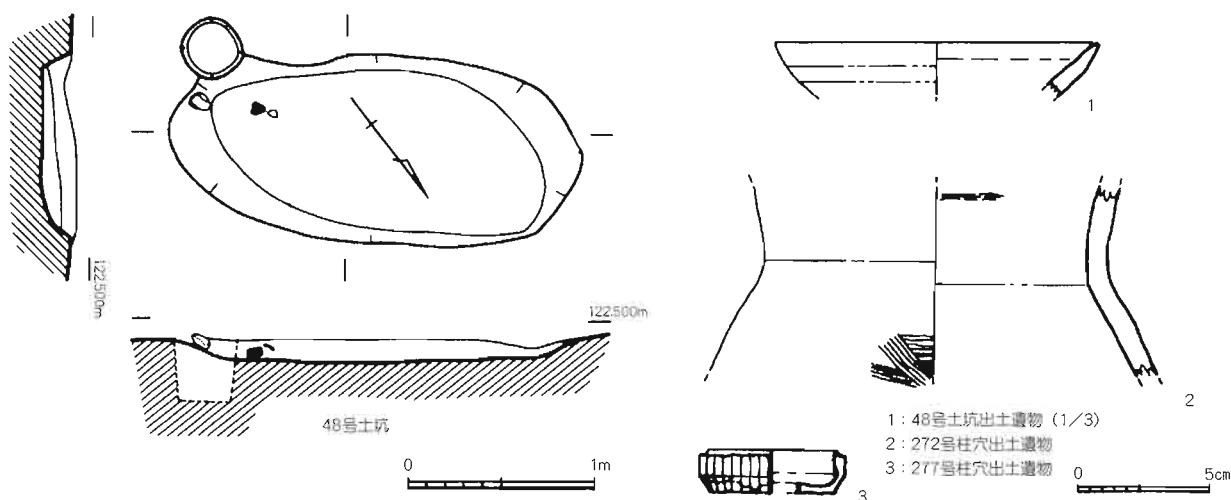
1号井戸に切られ、45号土坑を切っている土坑である。規模は長軸 $0.24m + \alpha$ 、短軸は残りが少ないため推定できず、深さ22cm前後を測る。埋土中からは遺物は出土していない。

47号土坑（第36図）

2号近世墓に切られている土坑である。規模は長軸 $0.34m + \alpha$ 、短軸は2号近世墓に切られているため測定できず、深さ25cm前後を測る。埋土中からは遺物は出土していない。



第32図 II区37~44号土坑実測図 (1/30・1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)



第33図 II区48号実測図実測図 (1/40) 及び出土遺物実測図 (1/3)、柱穴出土遺物実測図 (1/3)

48号土坑及び出土遺物 (第33図1)

楕円形で柱穴に切られている土坑である。規模は長軸2.12m、短軸1.01m、深さ5～18cmを測る。柱穴は径33cm、深さ34cmを測る。遺物1は土師質坏である。胎土には角閃石・石英・赤色砂粒が含まれている。焼成は良で、色調は内外面とも浅黄橙色で二次焼成を受けている。調整は内外面とも回転横ナデであるが、内外面とも磨滅している部分が多いため確認しづらい。復元口径は約12.9cmである。

272号柱穴出土遺物 (第33図2)

遺物2は壺である。胎土には角閃石・石英・赤色砂粒が含まれている。焼成は不良で、色調は内外面とも浅黄橙色で、外面にはハケ目が残っているが、内外面とも磨滅している部分が多いため確認しづらい。

277号柱穴出土遺物 (第33図3)

遺物3は中国産青白磁の合子である。時期は12～13C代で、復元口径は約5.7cmである。

1号井戸（第34図）

平面プランは楕円形を呈しており、45号土坑・46号土坑をそれぞれ切っている。規模は長軸1.36m、短軸1.48m、深さは1.20m以上を測る（この地点から水が湧きだし、作業がしづらくなったため掘り下げを中断した）。

遺物は茶褐色・暗褐色の小土器片を出土している。

2号井戸（第34図）

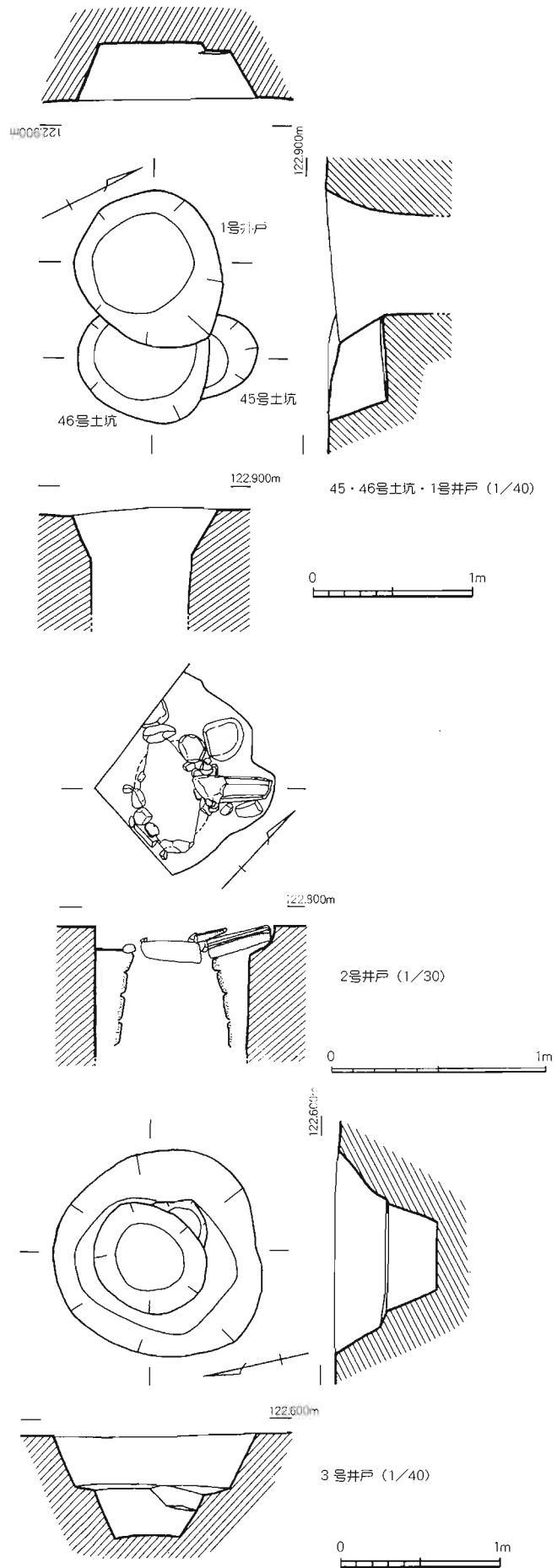
平面プランはほぼ円形を呈している。規模は長軸0.44m、短軸0.38mを測る。井戸の上には蓋をする形で、扁平な石を数枚のせていた。内部は河原石をらせん状に組んで積み上げられており、石の裏には粘土を貼って充填している。この河原石の大きさはほとんどが20～30cm大のものである。この井戸は、整地面で確認された。この整地は水田に伴うもので、埋没後はこの井戸を転用して排水施設として利用した可能性がある。

遺物は井戸の直上からにぶい褐色の小土器片を出土している。井戸内部からは遺物は出土していない。

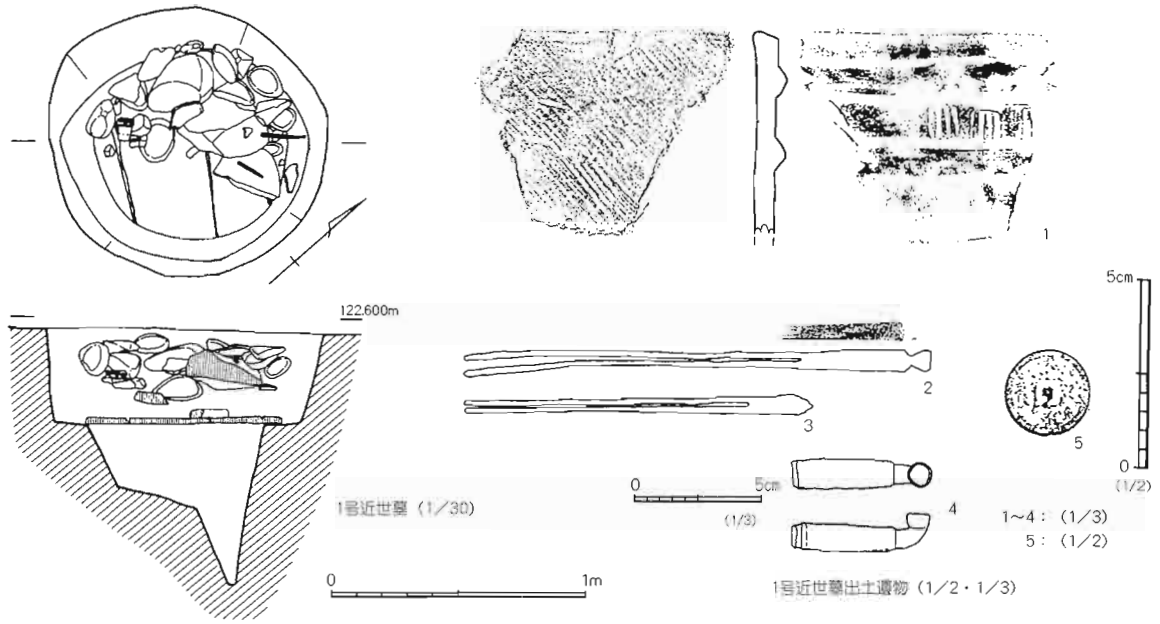
3号井戸（第34図）

平面プランはほぼ円形で、床面は2段掘りをなしている。規模は長軸1.02m、短軸0.96m、深さ28～65cmを測る。しっかりと掘り込みを有している。

遺物はにぶい褐色・赤褐色・暗褐色の小土器片を出土している。



第34図 II区45・46号土坑及び1～3号井戸実測図 (1/30・1/40)



第35図 II区1号近世墓実測図(1/30)及び出土遺物実測図(1/2・1/3)

1号近世墓及び出土遺物(第35図1~5)

平面プランは円形で床面は3段掘りを有している。規模は長・短軸とも1.08m、深さ38~102cmを測る。遺構内には大小の礫を多数含んでいる。また1段目の掘り込みの直上には桶底部分が残っていた。上部は整地する際に取り出しているものと考えられる。桶底は径73cm、厚さ2cmである。埋土は1段目の掘り込み部分は暗黒茶褐色、2・3段目の掘り込み部分は青灰色粘質土である。

遺物1は火鉢である。時期は17C後半~18C代で、色調は口縁部と内面は灰白色、外面は暗灰色で、内面にはカキ目が施されている。

遺物2は簪である。耳搔部分が小さく、鏡の部分に植物の葉の型押しがある。長さは全体で18.4cm、幅0.7cmである。時期は18C中葉以前のものだと思われる。

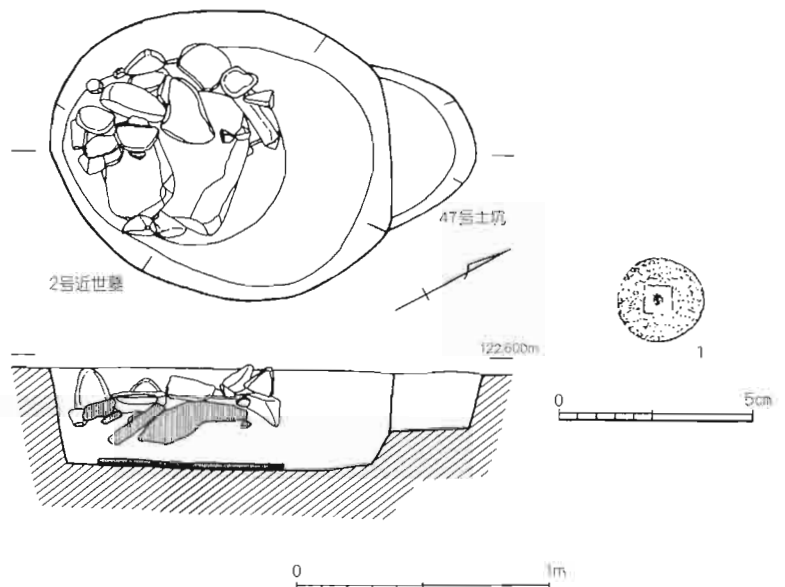
遺物3は簪である。耳搔部分が無い。長さは現存で13.6cm、幅0.7cmである。時期は遺物2と同様の18C中葉以前のものだと思われる。

遺物4は煙管の雁首である。火皿1.0cm、雁首1.4cm、胴部3.5cmで、羅宇の部分が一部残る。時期は18C中頃か?

遺物5は銭貨である。寛文期以後に鑄造された新寛永と呼ばれる寛永通宝。

2号近世墓及び出土遺物(第36図1)

楕円形で47号土坑を切っている。規模は長軸1.34m、短軸1.11m、深さ38cm前後を測る。遺構内には大小の礫を多数含んでおり、床面には径73cm、厚さ3cm前後の桶底が残る。上部は1号近世墓と同様の処置がとられたと思われる。遺物1は銭貨である。寛文期以後に鑄造された新寛永と呼ばれる寛永通宝。他に2枚寛



第36図 II区2号近世墓・47号土坑実測図(1/30)及び出土遺物実測図(1/2)

永通宝が出土している。時期は1号近世墓と同時期だと考えられる。

1号溝状遺構（第37図）

調査区の北西部にあり、十字を切る形で、一度途切れては再度東西に伸びている。また溝の末端部は42号土坑に注いでいるように思われる。規模は東西約3.96m+約1.32m、南北約2.06m、深さ3～6cm、幅14～36cmを測る。溝の内部には床面からの深さ15cmの小ピット、一部テラスを有している。溝の底の方には鉄分の堆積が見られることから、この溝に水の移動及び水の堆積があったことがうかがえる。整地した際に削平を受けたと考えられ、本来は途切れていた部分も繋がっていたと思われる。溝の末端部が42号土坑に注がれていたと思われるので、この42号土坑が貯水用施設の性格を持っていたと考えられる。遺物はにぶい褐色・暗褐色の小土器片が出土している。

2号溝状遺構（第37図）

調査区の西端、1号溝状遺構の南西部に位置し、南西から北東にかけて伸びている。また溝の末端部は土坑状の遺構に注いでいるように思われる。規模は南北約5.51m、深さ8～22cm、幅15～70cmを測る。溝の内部には一部テラスを有している。溝の底の方には鉄分の堆積が見られることから、この溝に水の移動及び水の堆積があったことがうかがえる。溝の末端部が土坑状遺構（平面プランは隅丸正方形で、規模は長軸1.01m、短軸0.90m、深さ38cm前後）に注がれていたと思われるので、この土坑状遺構が貯水用施設の性格を持っていたと考えられる。遺物は暗褐色・茶褐色の小土器片が出土している。

3号溝状遺構（第5図）

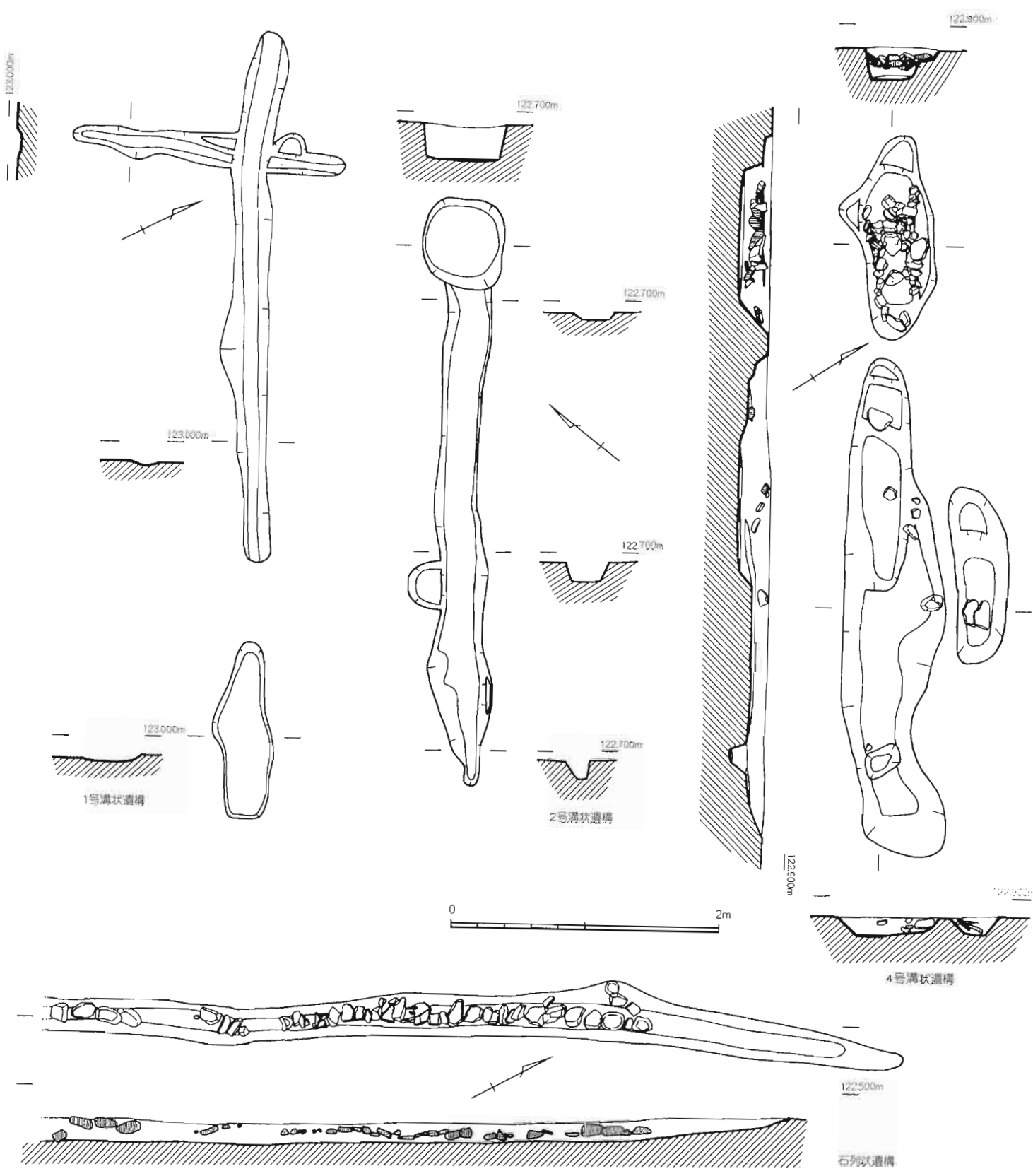
調査区の中央から東端まで、一度途切れる部分はあるが東西に伸びている。規模は東西約24.8m+約20.9m、深さ7～13cm、幅16～42cmを測る。また24・25号土坑等の土坑に切られ、13～15・17号掘立柱建物にも切られている。このことから時期が中世以降でないことがわかる。1・2号溝状遺構のように貯水用施設のようなものは伴っていない。遺物はにぶい褐色・茶褐色・明褐色の小土器片が出土している。

4号溝状遺構（第37図）

調査区の東側にあり、一度途切れる部分はあるが東西に伸びている。規模は東西約1.52m+約3.64m、深さ5～24cm、幅30～75cmを測る。この溝状遺構の隣に約1.32mの長さの土坑状遺構を伴っている。溝の内部には床面からの深さ13cmの小ピット、一部テラスを有している。また遺構内には河原石・凝灰岩等の礫を数多く含んでいる。1・2号溝状遺構のように貯水用施設のようなものは伴っていない。埋土中から遺物は出土していない。

石列状遺構（第37図）

調査区のほぼ中央に、ほぼ南北に伸びている。規模は南北約6.32m、深さ15cm前後、幅14～45cmを測る。河原石・凝灰岩等の礫が大小合わせて五十数個、規則的に並べられている。この遺構は意図的に造られ、使用されたものと考えられるが用途は不明である。



第37図 II区1・2・4号溝状遺構及び石列状遺構実測図 (1/40)

1号用途不明遺構及び出土遺物（第38図1）

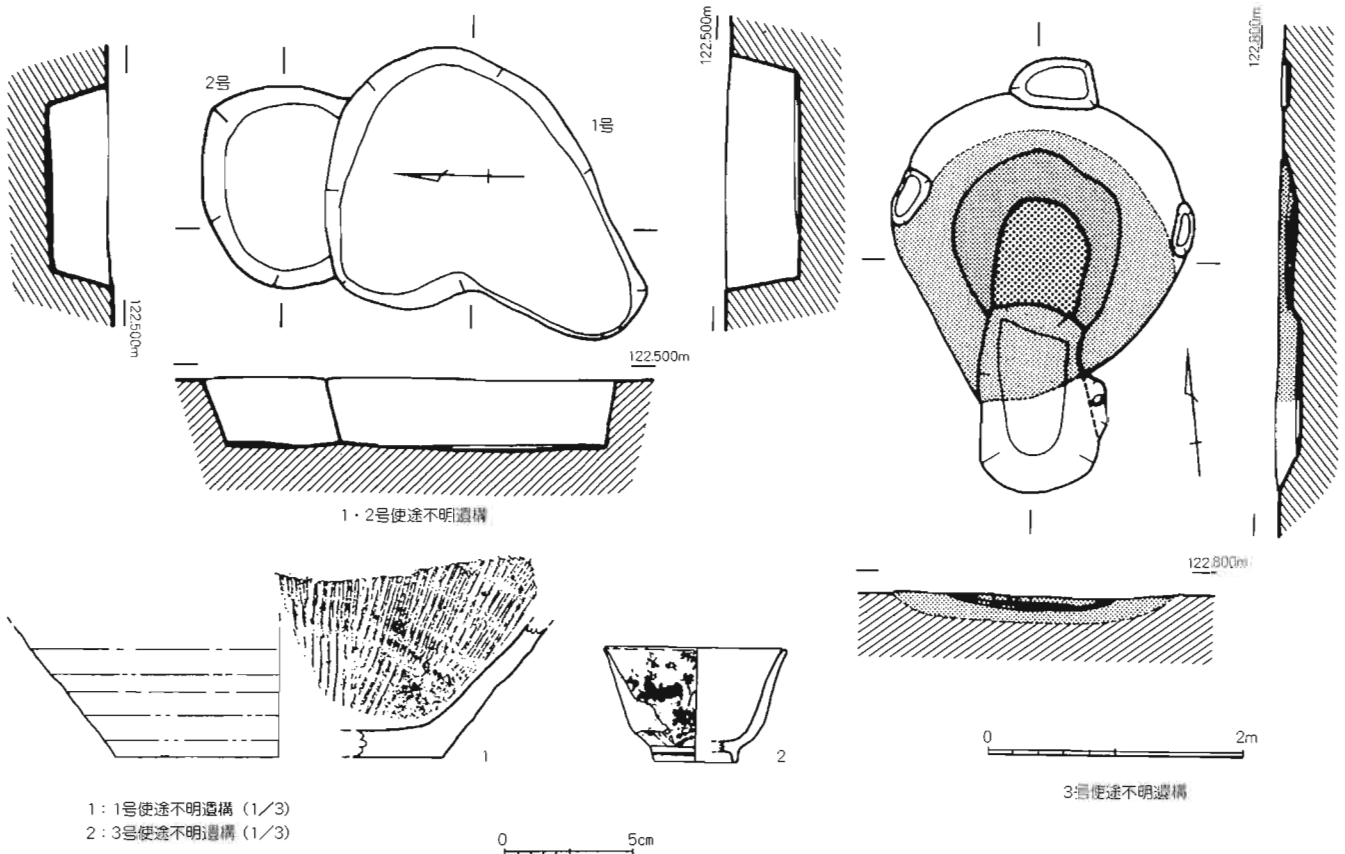
平面プランは不定形で、床面はほぼ平坦な遺構である。また2号用途不明遺構を切っている。規模は長軸1.11m、短軸0.96m、深さ37cm前後を測る。埋土に焼土及び炭化物が非常に多く含まれている場所や、それらがブロック状で混入している場所がある。壁や床面は非常に固くしまり、赤褐色に変色していたため、遺構内で火の使用が行われていたと思われるが、何を目的としていたかは定かでないため用途不明遺構とした。遺物1は挿鉢である。色調は内面が赤褐色、外面はにぶい赤褐色で、内外面ともにぶい橙色の焼土ブロックが付着している。復元底径は約13.2cmである。

2号用途不明遺構（第38図）

平面プランは楕円形をなしていると思われるが、1号用途不明遺構に切られているため確かでない。規模は長軸0.48m+ α 、短軸0.81m、深さ37cm前後を測る。1号用途不明遺構と同様に埋土には焼土及び炭化物が非常に多く含まれている場所や、それらがブロック状で混入している部分がある。壁や床面は非常に固くしまり、赤褐色に変色していたため、遺構内で火の使用が行われていたと思われる。ここでも1号用途不明遺構と同様、何を目的としていたかは定かでないため用途不明遺構とした。わずかに1号用途不明遺構よりは焼土及び炭化物の量は少なかった。

3号用途不明遺構及び出土遺物（第38図2）

平面プランは鍵形をなしている。規模は長軸1.71m、短軸1.11m、深さ6～9cmを測る。掘り込みが東・西・北側にあり、ここを支点として構築物があつたと考えられる。深さ2～7cmである。また南側には焚き口と思われる掘り込みが見られる。中央は赤褐色の硬化面となっており、周辺に熱が伝わり赤褐色化している。遺物2は染付の坏である。復元口径は約8.5cmで、時期は幕末～明治にかけてである。その他、鉄鍋の剥離片が多数出土している。



第38図 1～3号用途不明遺構実測図（1/30）及び出土遺物実測図（1/3）

3. Ⅲ区の遺構と遺物（第39図）

Ⅲ区の調査において検出した遺構は、掘立柱建物2棟・溝状遺構1条・柱穴20（小ピットを含む）を確認した。柱穴の中には、建物の存在が想定できるものと、できないものがあるが、ここでは全てを柱穴と総称している。遺物は土師質土器等の小土器片を出土しているが数は多くない。またⅢ区の東側調査区は、表土を剥いで精査を行ったが、柱穴が3個確認されたのみで、他に遺構は検出されていない。現在水田として利用されていたため、大部分が当時整地の際に削平を受けたものと思われる。このⅢ区の地山は暗褐色土層で、遺構内の埋土には明褐色土層・茶褐色土層が見られる。

1号掘立柱建物（第40図）

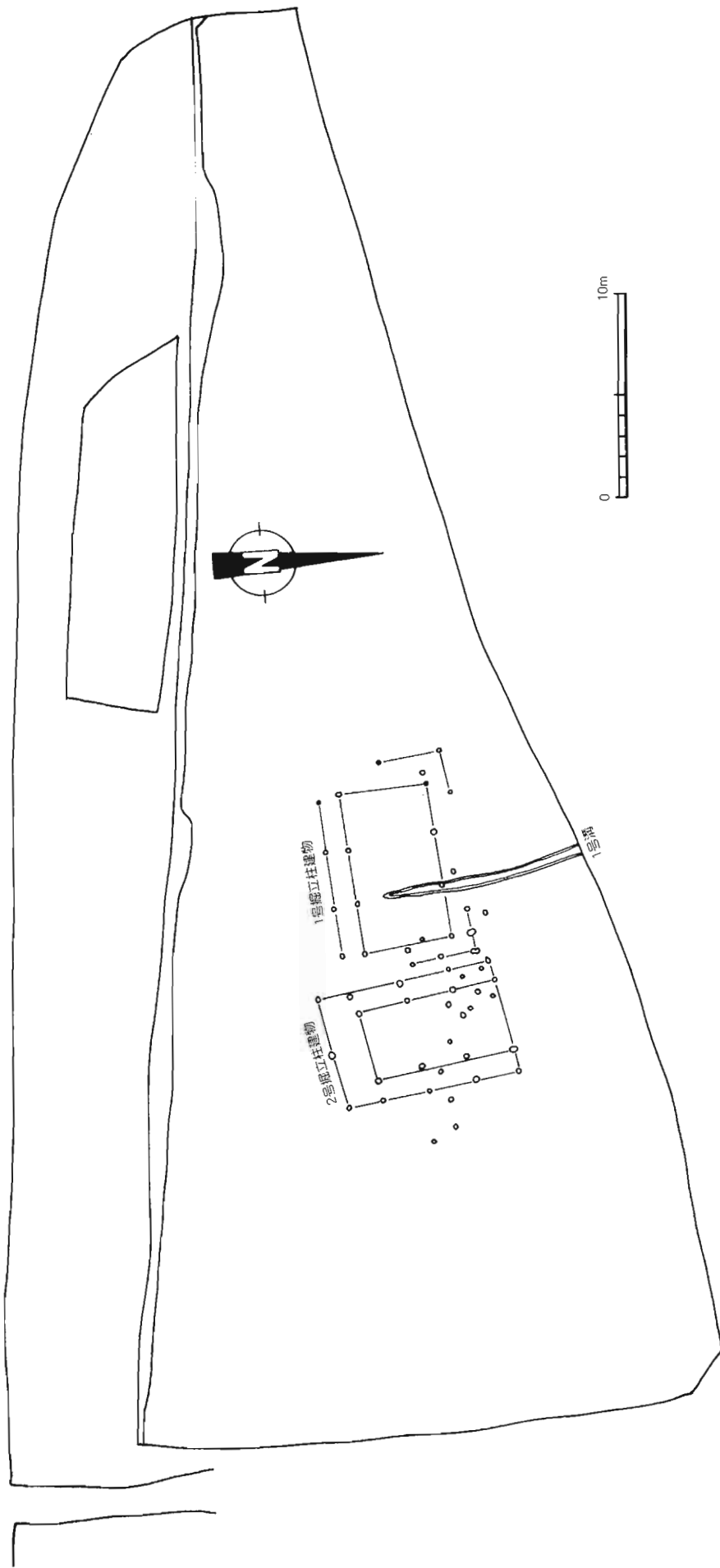
調査区のほぼ中央あり、1×3間で構成され、本体を囲むようにして北東側と北西側にL字形・南側に庇を伴っている。また1号溝状遺構を切っている。本体の規模は東西約7.56m、南北約5.00mで、検出面からの深さは13～32cmを測る。北東側のL字形柵列の規模は東西約2.10m、南北約3.05mで、検出面からの深さは13～29cmを測る。北西側のL字形柵列の規模は東西約2.20m、南北約2.90mで、検出面からの深さは9～21cmを測る。北東側・北西側のL字形柵列は小型の門構えだろうか。南側の庇の規模は東西約7.65mで、検出面からの深さは11～21cmを測る。南側の庇は、柱穴の規模から考えて庇の可能性はある。柱穴の埋土中から、茶褐色・にぶい褐色の小土器片を出土している。

2号掘立柱建物（第40図）

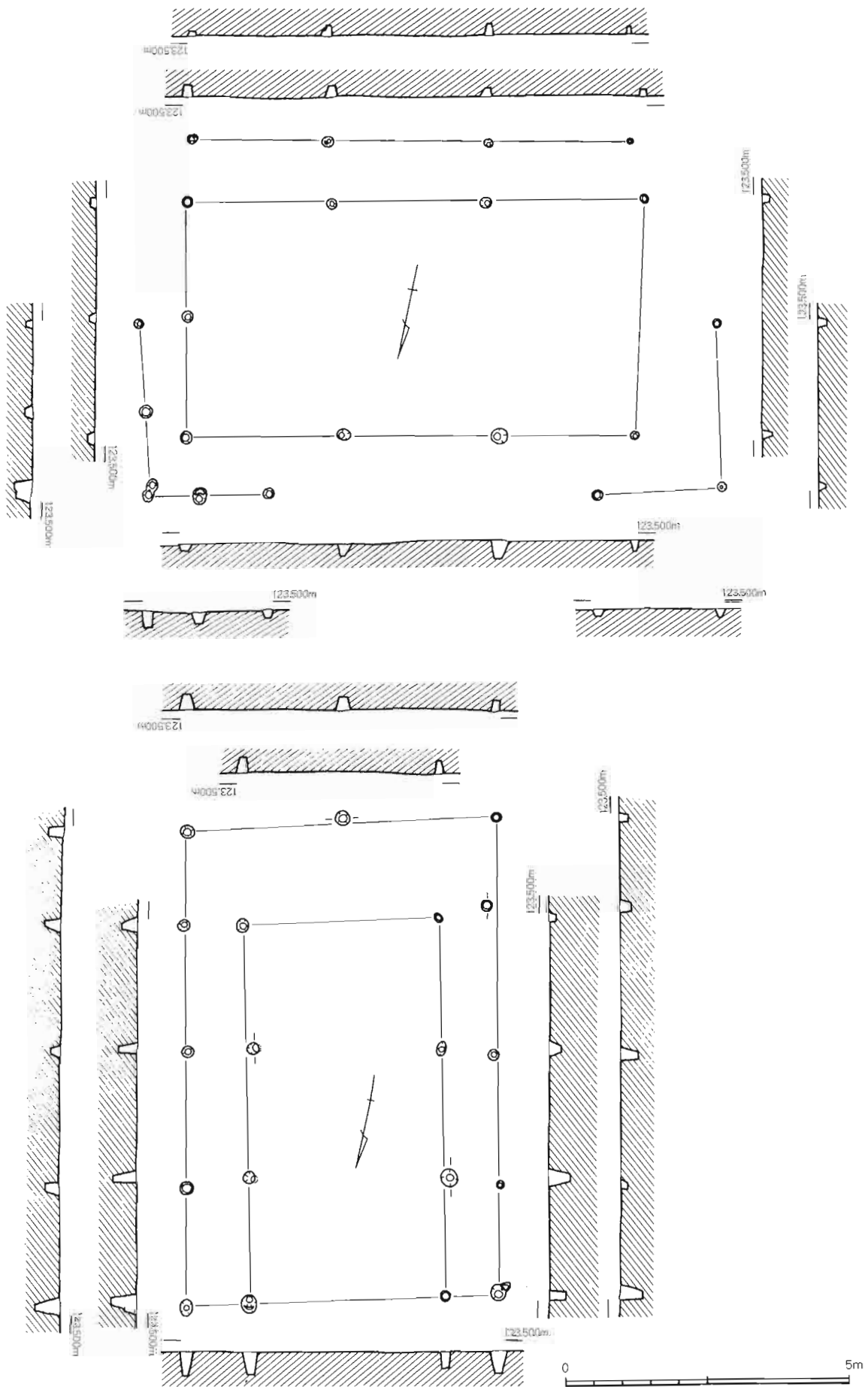
1号掘立柱建物の東側にあり、中央に1×3間で構成される。また、本体を囲むようにして東側・西側・南側に3面庇を伴っている。東側・西側ともに4間、南側は2間である。本体の規模は、東西約3.46m、南北約6.64m、検出面からの深さは14～44mを測る。3面庇の東側の規模は約8.34mで、検出面からの深さは16～46mを測る。西側の規模は約8.38mで、検出面からの深さは14～42mを測る。南側の規模は約5.46mで、検出面からの深さは18～27mを測る。柱穴の埋土中から遺物は出土していない。

1号溝状遺構（第39図）

調査区のほぼ中央にあり、1号掘立柱建物に切られている。溝状遺構はほぼ南北に伸びており、さらに北側の調査区外へと伸びている。規模は南北約0.98m、深さ3～6cm、幅30～44cmを測る。一部溝の底には鉄分の堆積が見られることから、この溝に水の移動、もしくは水の堆積があったことがうかがえる。また1号掘立柱建物に切られているため、時期は1号掘立柱建物よりも古い。



第39图 III区遗构配置图 (1/300)



第40图 Ⅲ区1·2号掘立柱建物实测图 (1/100)

第4章 ま と め

今回の山口遺跡の調査の成果についてまとめることとする。

I区では中世期から近世期にかけての溝状遺構と柱穴が確認された。しかし遺構の密度は薄く、調査範囲が限られているため、その性格ははっきりしない。

II区では古墳時代の竪穴住居跡、中世期の掘立柱建物・土坑・溝状遺構・柱穴、近世期の掘立柱建物・土坑・溝状遺構・近世墓・柱穴が確認された。

まず4基確認された竪穴住居跡についてはいずれもカマドが北壁に付設され、うち3基のカマドには袖石と支脚が残存し、壺や甕などのほかに須恵器坏蓋・高坏・埴瓶や紡錘車などが出土している。これらの竪穴住居跡の時期については、特に2号竪穴住居跡から上部がヘラ切り及びヘラ切り未調整である須恵器坏蓋が多数出土している。こうした須恵器坏蓋は1・3号竪穴住居跡にもみられ、このことから竪穴住居跡の年代は6C後半から7C前半代と考えられる。

次に掘立柱建物については中世期の6～17号掘立柱建物や柵列、近世期の1～5・18～21号掘立柱建物に分けられる。中世期の掘立柱建物は調査区のほぼ中央に集中して認められ、6号掘立柱建物からは底部に糸切りが施されている土師質土器皿、7～8号掘立柱建物からは第21図に示す白磁碗などが出土している。これらの資料から掘立柱建物群は12C後半～13C代のもと考えられる。また近世期の掘立柱建物をみてみると、1～5号掘立柱建物のように調査区西側と18～21号掘立柱建物のように調査区の東北側にそれぞれ2つのまとまりがある。なかでも2号掘立柱建物は西・南側に庇を有し、さらに隣接する1号掘立柱建物は2間×4間と検出している掘立柱建物のなかでは規模が大きいことなどからこの時期の中心的な建物と考えられそうである。

土坑についてはほぼ円形及び楕円形のプランを呈しているものが多く、なかには隅丸方形のプランを呈しているものが数基ある。なかでも15号土坑は底部に糸切りが施されている土師質土器皿が4点出土し、外面はヘラ削りが行われ、二次焼成を受けているものがほとんどである。これら土師質土器皿の復元底径は9.5cm前後と7.3cm前後の2種類あり、13C代の所産であろう。

近世墓については、1・2号近世墓ともに床面直上には桶底部分が残っている。桶底の径はともに73cmで、厚さ3cm前後である。これら近世墓の桶上部は後に水田として整地する際に取り出されたものと考えられ、出土した簪・煙管の雁首・寛永通宝などから18C中葉以前に位置づけられる。

III区では中世期の掘立柱建物・溝状遺構・柱穴がまとまりをもって確認された。

掘立柱建物は北東・北西側にL字形の柵列が伴い南面庇を有する1号掘立柱建物と、1間×3間規模の3面庇を有する2号掘立柱建物の2棟を確認した。これら掘立柱建物の時期に直接関わる遺物は出土していないが、遺構検出中に柱穴上面から12C～13C代の割花文の青磁碗破片が出土している。両掘立柱建物ともその軸方向が一致し、周辺に他の遺構が全くみられないことを考えると同一時期の建物であろう。

以上のように山口遺跡は古墳時代から近世期の遺跡であることがわかる。遺跡の西方には中世期にこの地域を支配していた師富氏の拠点があったと言われ、また日田永山布政所と森藩を結ぶ近世路が近接して遺跡の傍らを通っていたことが推定されることから、この場所は準所要知的要素があったものと考えられる。

写真図版

図版 1



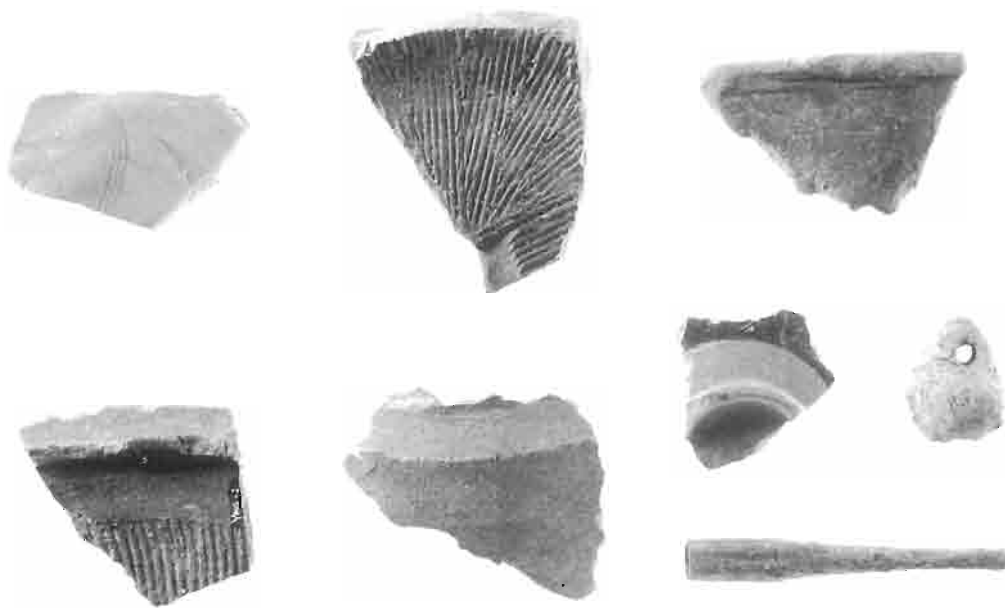
I区遠景航空写真（西から）



I区全景航空写真（真上から）



I 区出土遗物



I 区出土遗物

図版 3

Ⅱ区西側航空写真



Ⅱ区東側航空写真



Ⅱ区 1号竪穴住居跡
発掘状況



Ⅱ区 1号竪穴住居跡
カマド
土層断面



Ⅱ区 1号竪穴住居跡
カマド



図版 5



Ⅱ区2号竪穴住居跡
発掘状況



Ⅱ区2号竪穴住居跡
カマド
土層断面



Ⅱ区2号竪穴住居跡
カマド

Ⅱ区 3号竪穴住居跡
発掘状況



Ⅱ区 3号竪穴住居跡
カマド
土層断面



Ⅱ区 3号竪穴住居跡
カマド



图版 7

Ⅱ区1号近世墓
发掘状况



Ⅱ区1号近世墓
发掘状况
(桶·底部分)



Ⅱ区1号近世墓
完掘状况



Ⅱ区 2号近世墓
発掘状況



Ⅱ区 2号近世墓
発掘状況
(槨・底部分)



Ⅱ区 2号近世墓
完掘状況



図版 9

Ⅱ区 1号井戸
発掘状況



Ⅱ区 3号井戸
完掘状況



Ⅱ区 1号石列状遺構
発掘状況



Ⅱ区4号沟状遗構
発掘状況



Ⅱ区使途不明遺構
(1・2号)
完掘状況



Ⅱ区使途不明遺構
(3号)
発掘状況



图版11



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12

1. 1号豎穴住居 (第9图)
4. 1号豎穴住居 (第7图)
7. 2号豎穴住居 (第12图)
10. 2号豎穴住居 (第12图)

2. 1号豎穴住居 (第9图)
5. 1号豎穴住居 (第7图)
8. 2号豎穴住居 (第12图)
11. 2号豎穴住居 (第12图)

3. 1号豎穴住居 (第7图)
6. 2号豎穴住居 (第14图)
9. 2号豎穴住居 (第14图)
12. 2号豎穴住居 (第12图)



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24

- 13. 2号竖穴住居 (第12图)
- 16. 2号竖穴住居 (第11图)
- 19. 2号竖穴住居 (第11图)
- 22. 2号竖穴住居 (第11图)

- 14. 2号竖穴住居 (第11图)
- 17. 2号竖穴住居 (第11图)
- 20. 2号竖穴住居 (第11图)
- 23. 3号竖穴住居 (第16图)

- 15. 2号竖穴住居 (第11图)
- 18. 2号竖穴住居 (第11图)
- 21. 2号竖穴住居 (第11图)
- 24. 3号竖穴住居 (第16图)

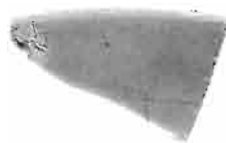
图版13



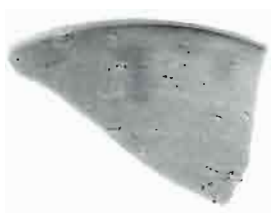
25



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36

25. 2号掘立柱建物 (第20图)

26. 6号掘立柱建物 (第20图)

27. 7号掘立柱建物 (第21图)

28. 8号掘立柱建物 (第21图)

29. 9号掘立柱建物 (第21图)

30. 3号土坑 (第25图)

31. 15号土坑 (第27图)

32. 15号土坑 (第27图)

33. 15号土坑 (第27图)

34. 15号土坑 (第27图)

35. 25号土坑 (第29图)

36. 41号土坑 (第32图)



37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



47



48

- 37. 48号土坑 (第33图)
- 40. 1号近世墓 (第35图)
- 43. 1号近世墓 (第35图)
- 46. 2号近世墓 (第36图)

- 38. 272号柱穴 (第33图)
- 41. 1号近世墓 (第35图)
- 44. 1号近世墓 (第35图)
- 47. 1号使途不明遺構 (第38图)

- 39. 277号柱穴 (第33图)
- 42. 1号近世墓 (第35图)
- 45. 1号近世墓 (第35图)
- 24. 3号使途不明遺構 (第38图)

Ⅲ区航空写真



Ⅲ区航空写真



報告書抄録

フリガナ	ヤマグチイセキ						
書名	山口遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書第20集						
シリーズ番号							
編集者名	山路康弘・土居和幸・吉田博嗣						
編集機関	日田市教育委員会						
所在地	〒877-0025 大分県日田市田島2丁目6-1						
発行年月日	2000年2月29日						
ふりがな	ふりがな	コード		北緯東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
やまぐち 山口遺跡	大分県日田市 大字東有田字山口	651			19980303 ～19980607	6,025m ²	ほ場整備
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
山口遺跡	I区	中・近世	柱穴、溝状遺構	土師質土器、陶磁器			
	II区	古墳時代	竪穴住居	須恵器、土師器、紡錘車			
		中世	掘立柱建物 溝状遺構	土師質土器、白磁、合子			
	III区	江戸時代	掘立柱建物 近世墓	近世陶磁器 簞、キセル、銭貨			
中世		掘立柱建物					

山口遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書

第20集

平成12年2月29日

発行：日田市教育委員会

大分県日田市田島2丁目6-1

印刷：日田時報紙器印刷株式会社

